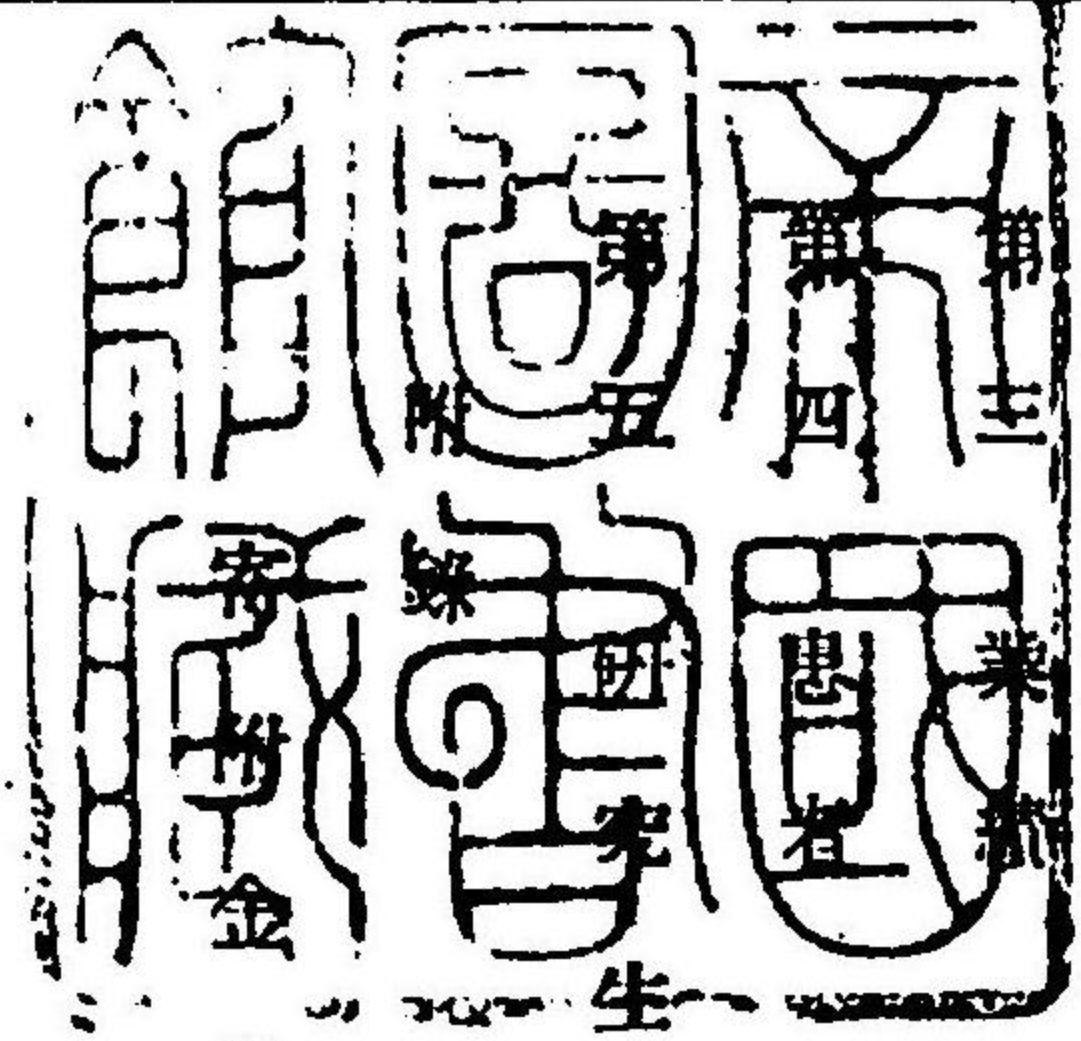


IF4N31

60-58

傳染病研究所一覽目次

第一 沿革  
第二 組織



品  
目  
錄



一	十	十	六	七
頁	二	八	十	十
	頁	頁	七	七
			四	四
			頁	頁

# 傳染病研究所一覽

## 第一 沿革

傳染病研究所ノ創設ハ實ニ明治二十五年十一月ニアリ是ヨリ前數月醫學博士北里柴三郎ノ獨逸國ヨリ歸朝スルヤ單身先ツ傳染病研究ノ事業ニ着手セントス福澤諭吉氏之ヲ聞テ大ニ其舉ヲ贊シ資ヲ抛テ其使用地ナル芝區芝公園第五號地ニ一家庭ヲ新築シ以テ其作業ノ場所ニ供セラル此工事ハ同年十月初旬ニ於テ起リ十一月下旬ニ至リ落成ヲ告ケタリ而シテ其研究ニ要スヘキ費用モ氏ノ獨力ニテ充辨セラレキ計畫ニシテ森村市左衛門氏亦器械費ヲ寄贈セラレ博士ノ事業漸ヤク其端緒ヲ啓カントスルニ至レリ

是時ニ當リ大日本私立衛生會ニ於テモ亦新ニ傳染病研究所ヲ設立シテ博士ノ事業ヲ遂行セシメントノ議起レリ是レ博士ガ多年同會ノ審事委員後ニ評議員ヲ兼

又タルノミナラス獨逸國留學中同會ヲ經テ長クモ 帝室ヨリ斯業研究ノ恩賜金  
ヲ拜受シタルコトアリシニヨリ博士カ歸朝ノ上ハ同會ニ於テ其研究所ヲ起シ以  
テ 聖恩ニ報セントスルノ意ニ出テタリシナリ今左ニ前私立衛生會頭山田伯爵  
ガ當時伯林在學中ノ博士ニ寄セタル書翰ヲ掲ケ其淵源スル所ヲ知ルノ便ニ供ス  
ヘシ

大日本私立衛生會會頭タル余ハ貴下カ留學滿期ニ際シ之ヲ繼續シテ肺癆治療  
法研究ノ事業ヲ完成セシムヘキ 特旨ノ恩賜ヲ拜戴シ茲ニ貴下ヲシテ一ケ年  
間獨逸國ニ留學セシメ該治療法習得ノ事ヲ囑託ス

宮内大臣ハ余ニ此優渥ナル 聖旨ヲ貴下ニ傳達スベキヲ令セリ則其令書ヲ  
寫シテ貴下ニ附ス余ハ貴下カ善ク之ヲ奉體シ匪勉拮据大ニ爲スコアルヲ信ズ  
ルナリ

余ハ貴下ト共ニ 天恩ト光榮トヲ荷ヘリ故ニ貴下カ此偉業ヲ幫助シ其成效ヲ

齋シ歸ルノ日ハ相共ニ其事ニ從フテ大ニ邦家ノ衛生ニ資シ以テ此 天恩ニ酬  
ヒ奉リ此光榮ヲ謝シ奉ランコトヲ期ス

明治二十四年十二月十五日 大日本私立衛生會會頭伯爵山田顯義

大日本私立衛生會審事委員醫學士 北里柴三郎殿

而シテ大日本私立衛生會評議員會ニ於テ傳染病研究所設立ノ議ヲ可決スルヤ同  
會副會頭長與專齋氏ハ福澤氏ニ對シ氏カ博士ノ爲メニ新築シタル家屋及土地ヲ  
其儘同會ニ引受クンコトヲ協議シタルニ氏ハ快ク之ヲ諾シ且其家屋ト土地トハ  
一切無料ニテ使用ニ供スヘキコトヲ約セラレタリ是ニ於テ大日本私立衛生會ハ  
左ノ委託書ヲ博士ニ交付セリ

本會ハ貴下ニ傳染病研究ノ事ヲ委託シ該經費トシテ向フ一ケ年間金三千六百  
圓ヲ支出ス

明治二十五年十一月十九日

## 大日本私立衛生會副會頭長與專齋

審事委員醫學博士北里柴三郎殿

博士ハ此委托ヲ肯諾シ終ニ二十五年十一月三十日ヲ以テ傳染病研究所ヲ開始スルニ至レリ是ニ於テカ其初メ福澤氏等ノ幫助ニ依リタル傳染病研究ノコトハ新クニ大日本私立衛生會ノ事業トナリ爾來内外ノ有志者ヨリ金品ヲ寄贈シテ翼賛ノ意ヲ表セラル、モノ少ナカラサリシ

然ルニ芝公園内ナル福澤氏ノ使用地ハ研究室ノ他ニ病室等ヲ建設スルノ餘裕ナク事業ノ擴張ヲ謀ル能ハサルヲ以テ二十六年一月大日本私立衛生會ハ東京府知事ニ對シ芝區愛宕町二丁目ニ於ケル内務省用地ノ貸下方ヲ出願シ翌月ニ至リ開厠ノ指令ヲ得タリ

同年一月十六日衆議院議員長谷川泰、島田三郎、大岡育造、古莊嘉門、柴四朗、鈴木重造、鈴木萬次郎、高田早苗ノ諸氏ハ議員箕浦勝人外百七十五氏ノ賛成ヲ得テ別ニ左ノ

建議案ヲ衆議院ニ提出セラレタリ

大日本私立衛生會設立傳染病研究所補助費ニ付建議  
傳染病ノ社會ヲ荼毒スル至慘ナリ乃チ之ヲ驅除スルノ方法ヲ講スルハ人生ヲ保護シ國利ヲ増進スルノ大計ニシテ之カ研究ヲカムルハ國家生存上殊ニ必要  
缺ク可カラサルモノトス爰ニ大日本私立衛生會ハ傳染病研究所ヲ設立シ現ニ  
勳三等醫學博士北里柴三郎ヲシテ之ヲ擔任セシメ僅カニ研究事業ノ端緒ヲ啓  
發スルコトヲ得タリト雖モ其規模狹小ニシテ充分其研究ノ結果ヲ得難キカ故ニ  
國庫ヨリ創立費補助トシテ金若干圓經常費補助トシテ向フ三少年間々々金若  
干圓ヲ右大日本私立衛生會設立傳染病研究所ニ補助相成度右及建議候也  
右衆議院規則第八十六條ニ由リ提出候也

明治二十六年一月十六日

此建議案ハ二月二十三日ノ議會ニ於テ可決シ即日之ヲ政府ニ建議セラレタリ是

ニ於テ政府ハ其意ヲ容レテ同二十五日該補助費ニ關スル追加豫算案ヲ議會ニ提出シ直ニ貴衆兩院ヲ通過シタルニヨリ遂ニ三月六日付ヲ以テ之ヲ公布セラレ同月十三日內務大臣ヨリ左ノ命令書ヲ大日本私立衛生會ニ交付セラレタリ

大日本私立衛生會

其會設立ノ傳染病研究所ニ對シ創立費補助トシテ金貳萬圓ヲ明治廿六年度ニ於テ下付シ研究所費補助トシテ明治廿六年度ヨリ明治廿八年度マテ三ケ年間毎年金壹萬五千圓ヲ下付ス依テ補助年限內其會ハ左ニ掲クル命令書ノ趣旨ヲ遵守スヘシ

明治廿六年三月十三日

內務大臣伯爵 井上 馨

命令書

第一 傳染病研究所ハ各傳染病ノ原因及豫防治法ヲ研究シ國家衛生法ノ審事

機關タルコトヲカムベシ

第二 傳染病研究所ノ事業ハ總テ醫學博士北里柴三郎ノ指揮ニ任スヘシ

第三 傳染病研究所ノ規則ハ其會ニ於テ之ヲ定メ內務大臣ノ認可ヲ受クヘシ其變更スルト亦同シ

第四 補助金ハ傳染病研究所創立費及傳染病研究所費ノ外ニ支消スルコトヲ許サズ

傳染病研究所創立費及傳染病研究所費ハ毎年三月一日マテニ翌年度ノ豫算ヲ定メ內務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

豫算科目ノ更正流用ヲ要スルトハ內務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第五 傳染病研究所ノ事業及出納ハ內務省衛生局長ヲシテ監督セシメ時々檢査ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第六 傳染病研究所ノ事業其成績及出納ハ毎年度經過後二ヶ月以内ニ於テ内

務省ニ報告スヘシ

第七 傳染病研究所ノ出納ハ會計検査院定ムル所ノ規定ニ從ヒ同院ノ検査ヲ受クルモノトス

第八 本命令書ニ違反シタルトハ補助金ノ下附ヲ停止シ且其支出殘額ヲ返納セシムルコトアルベシ

第九 本命令書第二ニ變動アルトモ若クハ研究ノ目的ヲ達シ得サルト認ムルトハ補助金ノ下付ヲ停止スベシ

是ニ於テ傳染病研究所ハ其規模ヲ擴張シ以テ其効績ヲ擧クンコトヲ期セサルヘカラス因テ曩ニ貸下ヲ受ケタル芝區愛宕町ノ地所ニ研究室及附屬病室等ヲ建築セントシ其設計ヲ内務技師工學士船越欽哉氏ニ委囑シ同四月四日府知事ニ出願シテ將サニ工事ニ着手セントスルニ方リ端ナク芝區民中ノ一部ニ故障ヲ生シ荏苒數月ヲ徒消スルニ至レリ然レドモ是レ畢竟當時相互ノ間ニ於テ意思ノ貫通セ

ザルモノアリシガ爲メナルベキヲ以テ茲ニ其始末ヲ細記スルコトヲ避ケ唯々今日ニ至リテハ曩昔其建設ヲ喜バサリシ區民諸氏モ亦タ厚情ヲ以テ我研究所ヲ遇スルニ至リタルコトヲ一言シ置クベシ

斯ノ如キ故障アリタルニモ拘ハラズ九月中旬ニ至リ府知事ヨリ研究所病室建築ノ許可ヲ得タルニヨリ直ニ全部ノ工事ヲ開始シ日夜督責翌二十七年二月七日ヲ以テ全ク竣工ヲ告ケタリ此新營ハ本館(研究室書籍室藥室事務所)病室解剖室動物舎消毒所浴室及賄所、二附屬舎ノ八棟ヲ含ミ諸般ノ設備一タビ成ル因テ翌八日ヲトメ之ニ移轉シ其附屬病室ノ如キモ同十七日ヨリ開始シタリ而シテ福澤氏ノ貸付セラレ居タル舊傳染病研究室ハ移轉後直ニ之ヲ氏ニ返還シ篤ク其厚意ヲ謝セリ此移轉ノ次年即チ二十八年ニ至リ曩ニ衆議院ヨリ建議セラレタル國庫補助ノ年期ハ早ク已ニ盡キントス是ニ於テ議員協阪行三、大東義徹、田艇吉、河島醇、高田早苗、大竹貫一、波多野傳三郎、山田泰造、佐々友房ノ諸氏ハ更ニ左ノ建議案ヲ議會ニ提出

セラレ三月十八日ノ議事ヲ以テ可決シタル上院議トシテ直ニ政府ニ建議セラレ  
タリ

大日本私立衛生會設立傳染病研究所補助費繼續ノ建議

斐ニ勳三等醫學博士北里柴三郎カ擔當セル大日本私立衛生會設立傳染病研究  
所ニ補助費ヲ給與セシニ其効空シカラス彼東北諸州ニ茶毒ヲ流シタル恙蟲病  
ノ毒芽ヲ發見シ古來不治ト稱スル所ノ癩病病毒研究ノ効ヲ顯ハシ又曾テ歐亞  
二洲ヲ蹂躪シ六千餘萬ノ生靈ヲ殄滅シタル「ペスト」ノ病菌ヲ香港ニ於テ查明シ  
千古未發ノ偉効ヲ奏シタリ今後尙ホ進ミテ之カ研究ニ從事セシメハ赤痢病其  
他年々慘毒ヲ極ムル傳染病素ヲ查察シ其撲滅方法ヲ講究シテ遂ニ該病毒ヲ一  
掃スルノ効功期シテ待ツヘシ今ヤ其研究漸ク發達セントスルノ際ニ當リ之  
カ補助費ヲ杜絶セハ其効ヲ一貫ニ缺クノ憾ナキ能ハス故ニ來ル二十九年  
度ヨリ尙ホ引續キ向三箇年間年々現今補助ノ金額ヲ大日本私立衛生會設立傳染病

研究所ニ附與スルノ豫算案ヲ編成シ次ノ議會ヘ提出アラソコトヲ望ム

明治二十八年三月八日

右ノ結果トシテ次期議會ニ政府ヨリ提出セラレタル二十九年  
度豫算案中ニハ繼續補助金ヲ編入シ原案ノ如ク兩議院ヲ通過シタルニヨリ二十九年四月  
内務大臣ハ更ニ左ノ如ク私立衛生會ニ介達セラレタリ

大日本私立衛生會

其會設立傳染病研究所ニ對シ尙從來ノ補助ヲ繼續シ明治二十九年  
度ヨリ同三十一年度マテ三ク年間研究所費補助トシテ毎年金壹萬五千圓ヲ下付ス依テ補  
助年限内其會ハ明治二十六年三月十三日付ヲ以テ下付セル命令書中創立費ニ  
關スル事項ヲ除クノ外各條項ノ趣旨ヲ遵守スヘシ

明治二十九年四月四日

内務大臣 芳川顯正

三十年五月新タニ寫眞室壹棟ヲ増築セリ是レ最新式寫眞器械ニヨリ細菌ノ形跡

ヲ撮影スヘキ爲メニシテ此ノ他逐日事業ノ増伸ニ伴ヒ諸建物ノ狹隘ヲ感スルニ至リタルヲ以テ二十九年三月ヨリ隣地ノ私有家屋壹棟ヲ三十年十二月ヨリ同上官有家屋四棟ヲ借入レ所用ニ供シ居レリ

### 第一組 組織

明治二十六年六月内務大臣ノ認可ヲ經テ定メタル傳染病研究所規則ハ左ノ如シ  
傳染病研究所規則(摘要)

#### 第一章 總則

第一條 傳染病研究所ハ醫學博士北里柴三郎ヲ所長トシ内務大臣命令ノ趣旨ニ據リ各傳染病ノ豫防治法ヲ研究シ國家衛生法ノ審事機關タルヲカムル所トス

第二條 傳染病研究所ノ事業并ニ豫算決算及出納ニ關シ内務大臣命令書ニ指示スル事項ハ總テ所長之ヲ專管シ本會頭ニ對シ之レカ責ニ任スヘシ

#### 第二章 職員

第五條 傳染病研究所ニ左ノ職員ヲ置キ下ニ掲クル人員ヲ以テ定員トス

- 所長 一人 部長 二人
- 助手 七人 藥劑師 二人
- 書記 三人

第六條 部長ハ所長ノ指揮ヲ受ケ各部ニ分屬シ部員ヲ監督シ各部務ヲ掌理ス  
助手ハ各部ニ分屬シ所長部長ノ指揮ヲ受ケ研究事務ニ從事ス  
藥劑師ハ所長部長ノ指揮ヲ受ケ調劑ニ從事ス  
書記ハ所長部長ノ指揮ヲ受ケ庶務會計ニ從事ス

#### 第三章 分課

第七條 傳染病研究所ニ學術部治療部藥室及事務所ヲ置シ  
學術部ハ傳染病原因豫防的接種及治法檢索ノ事ヲ司トル





書記

小倉 銈 八郎

同

岡田 寛 九郎

囑託(事務監督囑託)

吉 澤 環

休職職員ノ制ハ現ニ職務ヲ執ラシメサル必要アルモノ、爲メ三十年九月始メテ設ケタルモノニシテ其人員ハ研究所規則第五條ノ定員以外トナサンコトヲ内務大臣ニ上申シ認可ヲ得タリ北島助手ノ休職ハ歐洲ニ於ケル細菌學及傳染病學ノ發達進歩ヲ實際ニ調査研習セシムル爲メ博士ヨリ留學ヲ命シタルニ基クモノニシテ其留學ニ關シ内務大臣ヨリ左ノ令達ヲ受ケタリ

大日本私立衛生會

其會傳染病研究所ニ於テ助手北島多一ヲ獨逸國ニ留學セシムルニ就テハ同國ニ於ケル瀉車及船舶ノ檢疫並ニ傳染病豫防消毒ノ手續及其狀況ヲ調査報告セシムベシ

明治三十年九月二十四日

内務大臣伯爵 樺 山 資 紀

本所ハ又員外助手ノ制ヲ設ク(二十七年三月内務大臣認可)員外助手ハ本所ニ於テ細菌學ノ實地研究ヲナシ兼テ學術部又ハ治療部ノ助手ヲナスモノニシテ無給トス其三十年十二月末日ニ於ケル現員ハ左ノ如シ

員外助手

緒方 終 次郎

同

田 中 省 三

同

遠 藤 滋

同

梅 野 信 吉

同

林 長 吉

同

岩 井 正 浩

右ノ外内務大臣ノ命令ニヨリ岩崎海軍大軍醫(周次郎)ヲ二十九年五月ヨリ宮川海軍大軍醫(兵市)ヲ三十年四月ヨリ深谷陸軍一等獸醫(敬一)ヲ同年十一月ヨリ員外助

手同様ノ取扱トナシ傳染病研究ノ爲メ要スル費用ハ都テ本所ニ於テ支辨シ居レ  
リ尙都築陸軍二等軍醫甚之助戸塚陸軍二等軍醫機知醫學士ハ二十九年二月ヨリ  
三十年六月マテ矢部海軍大軍醫辰三郎ハ二十九年五月ヨリ三十年四月マテ本所  
ニ於テ研究ニ從事シタリ其取扱上ニ同シ

### 第二 業績

茲ニ本所ノ業績ヲ記スルニ當リ一言セサルヘカラサルモノアリ蓋シ學術ノ研究  
ハ一朝ニシテ其効果ヲ收メ得ヘキニアラス隨テ已ニ着手シタル諸般研究事業ノ  
如キモ其完成ヲ告ケタルモノハ十ノ二三ニシテ其餘ハ尙銳意研究中ニ係ルモノ  
ナリ而シテ其既成ノ業績ハ或ハ小冊子ニ綴リ或ハ専門雜誌ニ掲ケテ隨時之ヲ世  
ニ公ニシタルカ故ニ本書ニハ其標題ト著者ノ氏名トヲ掲ク且其要旨ヲ摘録スル  
ニ止ムヘシ但是レ等事業中ニハ博士ノ親ヲ研究シタルモノト豫メ課題ヲ分チ博  
士指導ノ下ニ助手ヲシテ專任從事セシメタルモノトアレドモ要スルニ總テ本所

ノ事業ニシテ各人任意ノ研究ニ係ルモノハアラザルナリ(標題ノ下ニ註記シタル年月ハ  
北報告ヲ公ニシタル時ヲ示ス)

恙虫病原調査報告(二十七年) 所長 醫學博士 北里柴三郎

恙虫病ハ越後地方ニ於ケル一種ノ傳染病ニシテ信濃川及阿賀川沿岸中一定ノ  
地域ニ限リテ流行スルモノナリ而シテ從來本病ニ就テ研究ヲ遂ケタルモノ鮮  
ナカラスト雖モ當時病原攻究ノ方法未タ完全ナラザリシテ以テ十分ノ結果ヲ  
得ルニ至ラザリキ本篇ハ博士ガ二十六年中同縣下ニ出張シテ數多ノ患者ニ就  
キ實驗攻査ノ末其病原ハ一種ノ「アラスモヂエン」ナルコトヲ認定シタル迄ノ順  
序方法ヲ記述シタルモノナリ

「ベスト」病ノ原因調査第一報告(二十七年八月)

所長 醫學博士 北里柴三郎

二十七年五月英領香港ニ「ベスト」ノ流行スルヤ博士ハ醫學博士青山胤通氏ト共  
ニ官命ヲ奉テ彼地ニ渡航シ「ベスト」患者ノ淋巴腺、血液等ヨリ一種ノ病原菌ヲ

發見シ次ア同死屍ノ内臟諸器ヨリモ同一細菌ヲ檢出シ細菌學的ニ培養及動物  
試験ヲ施シテ其細菌ハ「ベスト」ノ病原タルコトヲ確認シタリ本篇ハ右研究ノ成  
績ヲ記載シタルモノナリ

### 實布埤里亞及虎列刺病治療成績報告(二十八年)

所長 醫學博士 北里 柴三郎

本篇ハ血清療法ノ濫觴ヨリ血清製造法効力試験法、治療法、治驗等ヲ詳述シタル  
モノナリ而シテ實布埤里亞ニ關スル目次ハ左ノ如シ

- 一、實布埤里亞治療血清ノ免疫力
  - 二、實布埤里亞患者血清治療成績
  - 三、實布埤里亞治療血清ヲ以テ豫防注射ヲ施シタル成績
- 又虎列刺ニ關スル目次ハ左ノ如シ

#### 一、動物試験ノ成績

##### 免疫ノ方法

虎列刺ニ對スル免疫血清ノ効力

免疫血清強度ノ測定

虎列刺毒素ニ對スル免疫血清ノ効力

古弗氏ノ方法ニヨリ虎列刺ニ罹ラシメタル「モルモット」ニ對スル血清ノ効  
力

##### 治療的試験

#### 二、治療ノ成績

患者ノ統計

糞便ノ検査

血清治療ノ經過

血清ノ副作用

血清療法ニヨリテ全治シタル者ノ例

血清療法ヲ施セシモ諸症増悪死亡シタル者ノ例

虎列刺泰襲土

發病時ト血清治療トノ關係

血清ノ用法及一般治療法

補遺

二歳以下ノ小兒ノ虎列刺

妊婦及流産

年齢ト死亡トノ關係

結論

實布埤里亞患者ニ血清療法ヲ施シタルハ本所病室ニ於テシ虎列刺患者ニ之ヲ

施シタルハ東京府廣尾病院ニ於テセリ當時博士ハ廣尾病院ノ監督ヲ府知事ヨリ囑託セラレ居タルガ故ニ同院ノ醫務ハ總テ博士ノ指揮監督スル所タリシナリ此報告ニ記載スル實布埤里亞患者數ハ三百五十三人ニシテ其死亡ハ三十一人ニ過ギズ即チ患者百人ニ對スル死亡比例ハ八七八ナリ又虎列刺患者中血清療法ヲ施シタル者ハ百九十三人ニシテ死亡六十四人即チ患者百人ニ對スル死亡比例ハ三三一ナリ

吐瀉病患者糞便検査成績(二十九年一月)

助手 醫學士 北島 多一

二十八年五月虎列刺病ノ東京府下ニ侵入セントスルヤ府設臨時検査部ハ吐瀉病患者ノ糞便ヲ細菌學的ニ検査スルノ必要ヲ認メ其検査ヲ本所ニ委託シ次テ芝區ノ當局者モ亦虎列刺類似患者ノ糞便検査ヲ本所ニ依頼シタルヲ以テ博士ハ北島助手ヲ主任ト定メ其検査ニ從事セシメタリ本篇ハ即チ其検査成績ヲ報告シタルモノニシテ五月二十六日ヨリ七月末日ニ至ルマテ検査ヲ施シタル糞

便ノ總數百七十二、内虎列刺菌ヲ檢出シタルモノ八十三、虎列刺菌ノ存在セザリシモノ八十、成績不明ノモノ九ナリ此檢査ハ單ニ顯微鏡ヲ以テ施シタルノミニアラズシテ兼ヌルニ培養試驗動物試驗ヲ以テシタルガ故ニ成績ノ精確ナルベキハ言テ俟タズ篇中ノ目次左ノ如シ

糞便檢査ノ順序方法

第一糞便ノ性狀

第二顯微鏡的檢査

第三培養的試驗

其一「ペプトン」液

其二膠質平板培養

其三寒天培養

其四虎列刺赤色反應

第四動物試驗

吐瀉病患者糞便檢査成績表

丹毒菌ノ產出物ヲ以テ注射療法ヲ施シタル

丹毒患者治驗畧報(二十九年一月)

助手 淺川 範彦

丹毒病ノ治療法ニ就テハ從來諸種ノ方法アリ孰レモ殺菌力ヲ有スル藥劑ヲ以テ患部ニ塗擦スルカ若シハ之ヲ皮下ノ淺層ニ注入シテ皮膚ニ寄生スル所ノ丹毒菌ヲ撲滅スルノ目的ニ他ナラザリシナリ而シテ是レ等ノ療法ヲ施ストキハ多少病勢ニ影響スルノ場合ナキニアラザルモ未タ確實ナル頓挫療法ト認ムル能ハズ本篇述ル所ハ丹毒ノ病原菌ヲ肉汁中ニ培養シ一定ノ方法ヲ以テ之ヲ殺菌シタル後、患者ニ注入スルノ方法ニシテ之ヲ患者ニ應用シタルノ數未ダ多カラズト雖モ茲ニ收ムル所ノ治驗及其後ノ實驗ニ徴スルニ注射後久シカラズシテ熱度下降シ諸症從テ輕快スルハ每常目撃スル事實ナリ抑々丹毒ハ創傷傳染

病ノ一ニシテ一病院中時ニ本病ノ侵襲ヲ被リ數十ノ患者ヲシテ不幸ノ轉歸ヲ取ラシムルコトアルヲ以テ外科醫ハ最モ之ヲ嫌忌セリ但シ往年病原菌ノ發見アリテ以來豫防消毒ノ方法正鵠ヲ失ハス爲メニ今日ニ於テハ斷エテ往時ノ如キ流行ヲ來スコトナキモ尙ホ時ニ散發スルヲ免カレサルナリ本篇ノ療法ニシテ汎ク行ハル、ニ至ラバ本病ノ經過ヲ短縮シ其豫後ヲ善良ナラシムベキコト疑ヲ容レス而シテ此療法亦々細菌學の療法即チ免疫法ノ學理ヲ應用シタルモノナリ

石灰殺菌力試驗(二十九年一月)

助手 築山 俊次

病原的細菌ヲ撲滅シテ消毒ノ效ヲ奏スル藥品ハ枚舉ニ違アラズト雖モ消毒藥トシテ汎ク公衆ノ使用ニ供センニハ左ノ性質ヲ具備セザル可ラズ

第一殺菌力強劇ナルコト

第二價格ノ低廉ナルコト

第三供給上缺乏ナキコト

第四公衆ノ使用ニ放任シテ危険ナキコト

右ノ性質ヲ具有シタル消毒藥ハ石灰ノ他類例極メテ稀ナリ然ルニ坊間ニ販賣スル石灰ハ產地ノ異ナルニ從テ其効力ニ多少ノ強弱アルヲ免カレズ又牡蠣灰ト稱シテ貝殻ヨリ製シタルモノアリ一見酷ダ石灰ニ似タリト雖モ其消毒力ハ試験ヲ施スニアラザレバ知ル可ラズ是ヲ以テ効力試験ヲ本所ニ依頼スルモノアルニ際シ築山助手ヲシテ之レカ検査ニ從事セシメタリ

本篇ニ掲グルモノハ左ノ三種ニシテ現行傳染病豫防心得書十月三十三年ノ規定ニ從テ使用スルトキハ就レモ消毒力ノ確實ナルコトヲ認メ得タリ

- |             |            |     |      |
|-------------|------------|-----|------|
| 群馬縣北甘樂郡青倉村產 | 石灰         | 依頼人 | 堀口耕一 |
| 鹿兒島縣產       | 貝殻ヲ煨灼シタルモノ | 依頼人 | 鈴木 某 |
| 鹿兒島縣產       | 菊華石灰       | 依頼人 | 鹽田 某 |

### 結核菌ノ馬鈴薯培養ニ就テ(年二十九)

助手 井上 慶治

病原的細菌中ニハ人工培養ノ容易ナルモノト然ラザルモノトアリ回歸熱螺旋菌ノ如キハ發見以來已ニ二十餘年ヲ經過スルモ未ダ之ヲ人工ニ培養シテ成功シタルモノアルヲ聞カズ蓋シ其性嚴正寄生性ナルガ故ニ人畜ノ体内ヲ假ルニアラザルヨリハ發育滋蔓シ易カラザルガ故ナラン結核菌モ亦タ嚴正寄生性ナルガ故ニ之ガ人工培養ヲ成功シタル古弗氏ノ手腕ノ偉大ナルハ今ニ至ルマデ學者ノ感歎シテ止マザル所ナリ古弗氏ハ當初之ヲ培養スルニ方リ成ルベシ人牀又ハ動物牀ニ近似シタルモノヲ選擇シテ血清培養基ヲ創製シタリシガ其後ノイカイ及ルーノ二氏ハ普通寒天培養基ニ虞里斯林ヲ加フルトキハ能ク結核菌ノ發育ニ適スルコトヲ發見シタリ但寒天培養基ハ肉汁ニ寒天ヲ混シテ製スルモノナルガ故ニ之ヲ動植混合性培養基ト稱スルヲ得ベシ後チ數年ボーロースキイ及サントデル二氏ハ結核菌ノ馬鈴薯ニ發育スルコトヲ認め近時ルビンス

キー氏ハ馬鈴薯培養基ト動物性培養基トニ發育シタル結核菌ヲ比較研究シテ一ノ報告ヲナセリ井上助手ノ業績ハ大牀ニ於テルビンスキイ氏ノ方法ニ摸倣シタルモノニシテ馬鈴薯液汁培養基馬鈴薯寒天培養基以上單純植物性培養基馬鈴薯肉汁培養基馬鈴薯肉汁寒天培養基以上動植混合性培養基ノ四種ヲ製シ結核菌ヲ之ニ移植培養シテ其性狀毒性等ヲ比較研究シタルモノナリ

### 酢及醫油ノ虎列刺殺菌力ニ就テ(年三十九)

助手 醫學士 北島 多一

虎列刺菌ノ吾人体内ニ侵入スル門戸ハ消化器ニシテ飲食物主トシテ之ガ媒介ヲナスコト明カナル今日ニ於テハ飲食物ト虎列刺菌トノ關係調味料ト虎列刺菌トノ關係ヲ調査スルハ虎列刺流行時ニ方リテ飲食物調理上幾多ノ疑問ヲ解釋スルニ必要ナルベシ北島助手ノ試驗成績ニ據レバ「ギヤベツ」胡瓜、赤貝、魚肉各三十瓦ニ虎列刺菌ノ寒天培養數白金耳ヲ肉汁一〇〇立方仙迷ニ溶和シタルモ



ノヲ混シ十分ニ攪拌シテ二十分時間放置シタル後、酢一〇〇立方仙迷ヲ混シタルニ、キヤベツニ在テハ三十分ノ後、胡瓜赤貝ニ在リテハ一時間ノ後、魚肉ニ在テハ二時間ノ後、虎列刺菌ノ全ク死滅スルヲ目撃シタリ故ニ、飲食物ニ一定ノ酢ヲ加ヘテ長時間放置スルトキハ殺菌ノ効アルベシト云ヘリ又、醬油ハ普通使用スル方法ニテハ殺菌ノ効ナキヲ知レリ

横濱市ノ「ベスト」病(二十九、四十九)

部長 醫學士 高木友枝

二十九年三月二十九日横濱ニ來着シタル支那旅客一名「ベスト」疑似症ニテ同月三十一日ニ死亡シ已ニ埋葬ヲ了リタルコト、神奈川縣警察部ニ聞エタルヲ以テ警部長ハ他ノ必要ナル施設ヲナスト同時ニ本所ニ電話シテ所員ノ出張ヲ求めタリ依テ高木部長ハ林助手ト共ニ同地ニ出張シ夜ヲ徹シテ屍躰ヲ検査シ「ベスト」病ナルコトヲ確診シタリ本報告ハ該患者ノ來歴及ヒ病原菌検査ノ順序方法ヲ記述シタルモノナリ

牛痘苗ニ就テノ研究(二十五、九)

所長 醫學博士 北里柴三郎  
助手 梅野信吉

本篇ハ善那氏種痘發明百年紀念文トシテ起草シタルモノニシテ人痘漿、牛痘漿共ニ種々ナル病原菌及非病原菌ヲ含有スルガ故ニ一方ニ於テハ是等細菌ヲ亡滅シ一方ニ於テハ痘苗ノ効力ヲ障害セザラシメンガ爲メ左ノ目的ヲ定メテ研究ニ着手シ好果ヲ得タルコトヲ公ニシタルモノナリ

- 一 痘苗ヲシテ細菌絶無ノ者ヲラシメ而シテ其固有ノ痘力ヲ減滅セシメザルコト即チ純粹痘苗ヲ製スルコト
- 二 右ノ純粹痘苗ヲ用井痘類ニ不快ノ合併症ヲ發スルナカラシメ以テ細菌學的の本主義ヲ全フスルコト
- 三 從來ノ實驗ニ依レハ痘漿ヲ犢牛ヨリ犢牛ニ傳種スルニ接種部ハ速ニ化膿シ第三傳乃至第四傳ニ達スレハ痘種絶滅ス故ニ痘原種ハ再三痘漿ヲ採

取スルニアラサレハ單ニ動物ヲ以テ痘原ヲ繼續スル能ハス是レ痘苗中ニ含有スル病原菌ノ作用ニ依リ固有痘力ノ減殺セラレ、モノナルベキヲ以テ純粹痘苗ヲ製シ動物體ヲ以テ種繼ノ目的ヲ達セントスルコト

四 純粹痘苗ヲ得レバ他種細菌ノ蕃殖ナク隨テ固有痘力ヲ減滅スルコトナカルベキヲ以テ又永久ニ貯藏シ得ベキコト

右ノ目的ヲ定メテ種々研究シタル末、莫里斯林水加痘苗ニ〇・六六乃至〇・八、プロセントノ石炭酸ヲ注加スルトキハ殺菌確實ニシテ痘力ニ障害ナキコトヲ知り得タリ即チ之ヲ犢牛及人躰ニ接種シタル結果ヲ畧言スレハ左ノ如シ

一 痘苗中ニ〇・六六乃至〇・八、プロセントノ石炭酸ヲ加入スルトキハ痘苗中所含ノ非病原菌并ニ病原菌ヲ悉ク撲滅シ得而カモ痘力ノ減弱スルコトナシ故ニ吾人ノ目的タル純粹痘苗ヲ製スルコトヲ得タリ

二 右ノ純粹痘苗ヲ犢牛并ニ人躰ニ接種スルモ痘力確實ニシテ眞性痘顯ヲ生

シ不快ノ劇性炎症ヲ發スルコトナシ

三 右ノ純粹痘苗ヲ以テ生後一ヶ月乃至二三ヶ月ノ犢牛ニ繼傳スルニ六傳迄其効力ヲ傳フルコトヲ得タリ

四 右純粹痘苗ノ貯藏日數ニ就テハ今尙試驗中ナルヲ以テ從來ノ痘苗ニ比較シテ如何ナル差異アルヤハ之ヲ確定スルコト能ハスト雖モ今日迄ノ實驗ニ依レハ約百日ヲ經ルモ痘力ニ何等ノ障害ヲ及ボサマルハ事實ナリ

### 肺壞疽病原ノ探究<sup>第一報告</sup>(<sup>二十九年五月</sup>)

助 手 築 山 揆 一

肺壞疽ノ病原モ亦タ細菌ナルベキハ人ノ想像スル所ナレドモ未ダ確定ノ說ナシ本篇ハ肺壞疽患者ノ咯痰中ヨリ一種隻球菌様ノ病原菌ヲ檢出シ之ヲ細菌學的ニ調査シタル結果ヲ報告シタルモノナリ未ダ肺壞疽ノ病原トナスニ足ラズト雖モ此種ノ研究ヲ反覆スルトキハ遂ニ確實ナル病原ヲ發見スルノ日アルベキヲ信ズ

兵庫縣神戸市及香川縣ノ再歸熱ニ就テ(二十九年六月)

助手醫學士 北島多一

兵庫縣神戸市ニ於テハ二十九年三月ヨリ香川縣ニ於テハ二十八年七八月頃ヨリ再歸熱ノ流行ヲ來シタルニ依リ本所ハ内務大臣ノ命ニ依リ二十九年五月北島助手ヲ右二縣ニ派遣シタリ本篇ハ即チ右ニ關スル取調報告ナリ

山羊、鶏及鳩ノ結核菌ニ對スル感受性ニ就テ(二十九年六月)

助手 緒方終次郎

山羊、鶏鳩其他ノ鳥類ハ人類ノ結核ト同一ナル病症ニ感染スベキヤ否ニ就テハ諸家ノ實驗アリト雖モ其成績殊ニ其山羊ニ關スルモノ、如キハ概モスレハ同一ナルヲ得ズ吾人ヲシテ轉々迷路ニ彷徨セシムルモノアリ本篇掲グル所ノ試驗ハ是等諸説ノ當否ヲ判定センガ爲メニ施シタルモノニシテ山羊ノ試験ニ於テ得タル成績ヲ概括スレバ左ノ如シ

一結核菌ヲ山羊ノ皮下ニ注入スルトキハ局所ハ必ず乾酪變性ヲ來スコト

一山羊ニ注入シタル結核菌ハ久シク局所ニ生活ヲ保チ且久シク毒性ヲ保有スルコト

一結核菌ヲ山羊ニ注入スルトキハ久シク局所ニ生活ヲ保チ且久シク毒力ヲ保有スルモ全身結核ヲ發起セザルコト

要スルニ山羊ハ結核菌ニ對シ極メテ微弱ナル感受性ヲ有スルモノト謂フベシ又鶏及鳩ハ全ク感受性ヲ有セズ

牛疫ニ罹リタル牛ノ腸内容ヨリ得タル病原菌(二十九年七月)

部長醫學士 高木友枝

本邦ニ流行スル牛疫ハ其病毒ヲ朝鮮地方ヨリ輸入スルヲ常トス而シテ本邦ガ年々牛疫ノ爲メニ被フル損害ハ勞力ト金錢トヲ合セテ其額實ニ莫大ナルヲ以テ一朝其病原ヲ明ニスルヲ得バ豫防治療ノ方針立トコロニ確定シ國利ヲ増進

スルコト蓋シ僅小ニアラズ然ルニ從來歐洲其他ノ學者本病ノ病原ヲ檢索シタルモノ所説紛々トシテ歸一スル所ヲ見ズ本篇ハ二十九年一二月ノ交東京府下ニ牛疫ノ流行シタルニ際シ高木部長ガ梅野助手ト共ニ其病原ヲ檢索シ其結果患牛ノ小腸ヨリ一種ノ病原菌ヲ發見シ之ヲ細菌學的ニ調査シタル顛末ヲ報告シタルモノナリ本菌ハ未ダ牛疫ノ病原ト定ムルニ足ラズト雖モ流行ノ機ニ會フ毎ニ此種ノ研究ヲ繼續セハ早晚目的ヲ達スルノ期アラシ

石灰乳ノ咯痰中結核菌ニ對スル試驗(第一報告)(二十九年七月)

助手 村田 具清

石灰乳ハ能ク咯痰中ノ結核菌ヲ滅殺スルニ足ルヤ否ヲ試驗シタルモノニシテ石灰乳ハ五倍ノモノ、咯痰ハガフキ一表第三號乃至第十號ノ結核菌ヲ含ムモノヲ用井混合比例ハ石灰乳百分咯痰五十分ヲ以テシタリ右ノ試驗ニ依リテ得タル成績ヲ總括スレバ左ノ如シ

- 一、製造後九十六時間ヲ經過セシ石灰乳ト雖モ咯痰ヲ混合シ充分丁寧ニ攪拌混和スレバ雜菌及結核菌ハ培養基ニ發育セズ
- 二、石灰乳ガ咯痰中ノ細菌ニ及ボスカハ其咯痰ノ溶崩スルト否トニ依テ反對ノ成績ヲ顯ハス即チ混合シタル咯痰全ク溶崩シテ石灰上ニ沈澱スルニ至レバ雜菌ハ多ク死滅シ、咯痰溶崩セズシテ上層即チ石灰水中ニ浮遊スルトキハ毫モ其作用ヲ及ボスコトナシ
- 三、咯痰ノ石灰乳ニ於ケル溶解度ハ時間、咯痰ノ性質及量并ニ攪拌ノ如何ニ關ス即チ混合後長時間ヲ經過スレバ能ク溶解ス、咯痰ノ濃厚粘稠ナルモノハ溶解シ難ク、濃厚ナルモノ粘稠ナラザル(膿汁様)モノハ溶解シ易ク、攪拌スレバ容易ニ溶解シ且咯痰混合量多キニ從ヒ溶解シ難キニ至ル
- 四、咯痰溶解セバ雜菌ハ二十四時間ニシテ死滅スルモ枯草菌ハ四十八時ノ後チ尙ホ能ク生存ス

結核菌ハ培養基ニ發育スルコト難キガ故ニ培養試驗ヲ以テ結核菌ノ生死ヲ斷言スルコト能ハス故ニ石灰乳ニ咯痰ヲ混シ二十四時間ヲ經過シタルモノヲモルモットノ腹壁皮下ニ注入シタルニ動物ハ約一週日ヲ經テ結核ニ罹リタリ故ニ石灰乳ハ二十四時間内ニ結核咯痰ヲ消毒スルノ力ナキモノトス

腸室扶斯治療血清ニ就テ(二十九年八月)

助 手 田 中 省 三

本所ニ於テ成功シタル治療血清ノ種類ハ實布埤里亞、破傷風、虎列刺等ニシテ腸室扶斯モ亦タ其一ニ居ル本篇ハ即チ腸室扶斯ヲ免疫治療スベキ血清ヲ製スルノ方法順序ヲ縷述シタルモノナリ  
本篇掲グル所ノ目次ハ左ノ如シ

免疫ニ使用シタル室扶斯菌ノ毒力

免疫ニ使用シタル動物ノ種類並ニ免疫ノ方法

免疫動物血清ノ効力試験

第一家兔ノ血清試験成績

第二犬ノ血清第一回試験成績

第三犬ノ血清第二回試験成績

第四犬ノ血清第三回試験成績

第五犬ノ血清第四回試験成績

第六驢馬ノ血清第一回試験成績

第七驢馬ノ血清第二回試験成績

免疫法ヲ行ヒタル犬ノ産兒血清効力試験

免疫法ヲ行ハザル動物血清ノ室扶斯菌ニ對スル効力試験

第一免疫法ヲ行ハザル馬ノ血清試験成績

第二免疫法ヲ行ハザル犬ノ血清試験成績

以上試験ノ結果ヲ約言スレバ左ノ如シ

一室扶斯菌肉汁培養ヲ以テ漸次ニ分量ヲ増加シツ、動物ニ注入スレバ其動物ハ該菌ニ對シ免疫性ヲ有スルニ至ル而シテ既ニ免疫シタル動物ノ血清ハ室扶斯菌ノ毒力ニ對シテ特異ノ防禦力ヲ有ス

一免疫ノ高度ニ進ミタル動物ノ血清ハ其〇〇五立方仙迷ヲ以テ南京鼠ニ對スル室扶斯菌ノ致命量十倍ノ毒力ヲ無害ニナスコトヲ得

一人工免疫法ヲ行ハザル犬及ヒ馬ノ天然血清モ亦室扶斯菌ノ毒力ヲ防禦スルノ性アリ然レドモ其血清ハ〇〇五立方仙迷以上ニ非ザレバ南京鼠ニ對スル室扶斯菌ノ致命量ヲ防禦スルコト能ハズ

一免疫シタル牝犬ノ産兒ヨリ獲タル血清ハ天然ノ血清ニ比スレバ室扶斯菌ニ對スル防禦力遙カニ優レリ

右ノ如ク動物試験上好結果ヲ得タルニ依リ更ニ之ヲ人肺ニ應用セシニ亦好結果ヲ得タリ而シテ本篇ニハ其治驗ヲ併記ス

吐瀉患者糞便中ニ於ケル一種ノ螺旋菌(二十九年八月)

助手 醫學士 北 島 多 一

二十九年七月二十九日築山助手俊次ハ一患者ノ糞便中ヨリ一種ノウィブリオヲ檢出シタリ本篇ハ其菌ニ就テ細菌學的ノ調査ヲ遂ゲタル報告ニシテ其形狀虎列刺菌ニ類スルモ虎列刺血清ノ影響ヲ受クザルコト、膠質扁平培養ノ狀態動物試験ノ結果等ニ依リ虎列刺菌ニアラスシテ寧ロメチニコフ菌ニ近似スルモノナルコトヲ説キタルモノナリ

消毒劑「アルボース」ノ殺菌力試験(二十九年八月) 助手 林 長 吉

東京市深川扇橋製藥會社製造「アルボース」ト稱スル消毒劑ノ殺菌力ヲ試験シタルモノナリ「アルボース」ニ三種アリ一ヲ白製「アルボース」ト云ヒ二ヲ「アルボース」軟石鹼ト云ヒ三ヲ「アルボース」石鹼ト云フ試験ノ結果ニ依レハ此消毒劑ハ虎列刺菌又ハ室扶斯菌ヲ滅殺スルノカアルモノトス

横濱市ノ虎列刺ニ就テ(二十九年十月)

助手 村田昇清

二十九年十月横濱市ニ虎列刺病ノ發生スルニ際シ其病毒ハ新タニ外國ヨリ輸入シタルモノナルヤ將タ前年ノ餘燼再燃シタルモノナルヤヲ調査シタル報告ナリ

孟買市ヨリ送付シタル「ベスト」培養物ノ検査成績(二十九年)

助手 ドクトル 中川愛咲

二十九年ノ夏印度孟買市ニ「ベスト」發生ノ警報ニ接スルノ後數日同市ノドクトル「サルヴェヤール」氏ハ書ヲ本所長ニ寄セ氏ノ「ベスト」ト診断セシ要點ヲ述ベ且ツ別ニ送付スベキ試験管培養物ニ就テ「ベスト」菌ノ存否ヲ鑑定セラレシコトヲ乞ヘリ然ルニ氏ノ送附シタル培養物ハ純粹ノモノニアラズシテ種々ノ細菌ヲ混在シタルガ故ニ一々之ヲ分離シタル後細菌學的調査ヲ施シタルニ遂ニ「ベスト」菌ノ存在ヲ認ムルコト能ハザリシ想フニ當初ハ「ベスト」菌ノ存在シタルモ培養

ノ純粹ナラザルガ爲メ航海日ヲ重キタル内生存競争ノ結果遂ニ滅亡セシモノナラン本篇ハ右検査ノ顛末ヲ記載シタルモノナリ

虎列刺血清ノ内服及注射ノ一治驗(二十九年)

助手 築山俊次

虎列刺ニ對スル血清療法ハ單ニ注射ニノミ頼ルヨリモ之ヲ内服セシムルトキハ一層好結果ヲ得ベキコトハ廿八年廣尾病院ノ治驗ニ徴シテ明ナリ本篇ハ即チ其治驗ニ一チ加ヘタルモノニシテ注射ト内服トヲ兼用スルトキハ諸症ノ速ニ輕快スルノミナラズ腸内ノ虎列刺菌モ早ク死滅スルコトヲ目撃シ且其理由ヲ説明シタルモノナリ

「ベスト」菌ニ就テ(二十九年)

所長 醫學博士 北里柴三郎

二十七年英領香港ニ「ベスト」ノ流行スルヤ博士ハ彼地ニ於テ「ベスト」ノ病原菌ヲ發見シテ之ヲ世ニ公ニセシニ近頃ニ至リ「ベスト」患者ノ躰中ニ於テ他ノ病原菌

ヲ檢出シタルモノアリ而シテ其菌ハ曩ニ香港ニ於テ研究シタル佛人イエルサ  
ン氏ノ發見シタルモノニ異ナラズト云フニ至リ世人ハ其眞偽ヲ判知スルニ惑  
ヘリ是ニ於テ博士ハ二十九年十二月十一日ニ開キタル東京醫學會ニ於テ一場  
ノ演說ヲナシ「ベスト菌」ノ性狀ヲ畧說シ其イエルサン菌ト異ナル諸點ヲ示シ「ベ  
スト」ノ病原ト認メタル理由ヲ説明シタリ本篇ハ即チ其大要ヲ筆記シタルモノ  
ナリ

北里氏ノ「ベスト」桿菌トイエルサン氏ノ「ベスト」桿菌(二十九年)

醫學士 戶塚 機 知

兩種ノ「ベスト」菌ヲ比較研究シテ其異同ヲ示シタルモノナリ

「ベスト」病ノ原因調査(二十年) 所長 醫學博士 北里 柴三郎

博士カ香港ニ於テ行ヒタル「ベスト」病ノ原因調査ノ結果ハ二十七年八月第一報  
告トシテ世ニ公ニセシカ其後引續キ該病原菌ノ研究ニ從事シ以テ其所在形状

并ニ性質ヲ詳ニスルコトヲ得、又進メテ動物免疫試驗ヲ行ヒ好結果ヲ得タリ即  
チ「ベスト」菌肉汁培養ヲ攝氏六十度ノ温ニ二十分時間接觸セシメタルモノ或ハ  
三四週間孵卵器内ニ藏メテ自カラ其生活ヲ失ハシメタルモノヲ撰ビ家兎及ヒ  
「モルモット」ニ、初メハ其少量ヲ、次テ漸々増量シテ注入スルコト十ヶ月乃至一ケ  
年ニ亘レハ其動物血液中ニハ抗毒素ヲ產生ス而シテ既ニ抗毒素ヲ產生シタル  
血清ハ他ノ動物ニ對シ豫防及ヒ治療ノ効力アリ本篇ハ其ノ成績ヲ詳報セルモ  
ノナリ

丹毒連鎖狀球菌血清ニ就テ(三十年) 助手 緒方終次郎

丹毒病ヲ治療スルニ同病原菌ナル連鎖狀球菌ニ免疫シタル動物ノ血清ヲ用井  
偉効アリトノ說アリ果シテ此種細菌ヲ以テ動物ヲ免疫スルヲ得、又其血清ヲ以  
テ動物ヲ救療シ得ルトセハ唯リ丹毒ノミナラス實布埤里亞ノ混合傳染又ハ肺  
結核ノ混合傳染症ニ血清療法ヲ行ヒ得ヘキ望アルヲ以テ之ヲ實際ニ確證スル



ハ必要ノ問題ナリ本篇ハ即チ之ヲ實驗シタル報告ニシテ其成績左ノ如シ

第一 丹毒球菌ノ肉汁培養并ニ寒天培養ヲ漸次増量シテ動物ニ注入スレハ其動物ハ該菌ニ對シ人工免疫性ヲ得ルコト

第二 免疫シタル血清ハ〇〇〇二立方仙迷ヲ以テ南京鼠ニ對スル丹毒菌ノ致命量ヲ防禦シ〇〇〇五立方仙迷ヲ以テ十倍量ヲ防禦シ得ル特異ノ性質ヲ有ス

第三 免疫シ得タル動物ト雖モ最終毒素注入後一週以内ニ採血スルルハ其血清ハ效力ナキコト

第四 免疫シ得タル動物ヨリ採血スル好時期ハ最終毒素注入後三週以上ナルコト

第五 免疫ノ高度ニ進ミタル動物ノ一定量ノ血清ハ一定量ノ丹毒菌ヲ全ク無害ニナシ且ツ破滅スルノ力ヲ有スルコト

### 人躰ニ施シタル腸室扶斯病豫防接種試験(三十二年)

助手 田 中 省 三

虎列刺病豫防ノ目的ヲ以テ法ニ依リ虎列刺菌ヲ人躰ニ接種スレハ能ク豫防ノ目的ヲ達シ得ヘク又腸室扶斯病モ同一ノ豫防接種法ニ依リ人躰ヲ不感受性ト爲ストノ説アリ此方法ニシテ果シテ確實ナル豫防効力アリトセハ實ニ人生ノ大幸ナリト云フヘシ然ルニ腸室扶斯ニ就テ爲シタル豫防接種法ノ諸家ノ報告ハ未タ悉サ、ル所アルヲ以テ本篇ハ左ノ問題ヲ解釋センカ爲メ研究シタル試験報告ナリ

第一 腸室扶斯菌ノ少量ヲ一二回人躰ニ注射シテ免疫力ヲ生スルト云フ説ハ是認スヘキモノナルヤ

第二 其説果シテ是認スヘクンバ其免疫力ハ幾許ノ時日間保持セラレヘキヤ又天然ノ腸室扶斯快復者ノ免疫力保存時日トノ差異ハ如何

- 第三 被接種者ノ免疫力ト天然ノ腸窒扶斯快復者ノ免疫力トノ強度ノ差異如何
  - 第四 被接種者ニ危険ナル併發症ヲ發スルコトナキヤ又其健康ヲ害スルコトナキヤ
  - 第五 如此少量ヲ注入シテ比較的高度ノ免疫力ヲ享受スルハ人類ニ特異ノモノナルカ將タ他動物ニ在テモ同一ナル効果ヲ生スヘキヤ
- 右ノ問題ニ對シ十數名ノ健康者ニ豫防接種法ヲ施シ左ノ成績ヲ得タリ
- 第一 殺菌シタル窒扶斯菌寒天培養ノ少量ヲ接種セラレタル人ノ血清ハ比較的高度ノ免疫力ヲ得テ天然ノ腸窒扶斯ヲ經過シタル者ノ血清ト殆ント同一ナル免疫力ヲ有ス
  - 第二 被接種者ト天然腸窒扶斯快復者ト何レカ久シク其免疫力ヲ保存スルカハ尙ホ研究ヲ要ス然レトモ接種後第四十日迄ハ零ト同一ナル力ヲ

有ス

- 第三 該接種法ヲ行フ際ニハ殆ント暫時ノ發熱ノミニシテ他ニ危険ナル症狀ヲ發セシコトナシ且ツ接種前後ノ血量ヲ比較スルニ格別ノ増減ナシ
- 第四 如此少量ノ接種ニテ比較的高度ノ免疫力ヲ得ルハ人躰ニ特異ニシテ「モルモット」及馬ニハ不能ナルカ如シ
- 第五 窒扶斯免疫血清ノ免疫力ト其菌ヲ凝集スル作用トハ全ク別種ノモノニシテ此二作用ハ一血清中ニ正比例シテ存在スルモノニ非ス時トシテハ免疫力ハ尙ホ存スルモ凝集作用ハ既ニ消失シ時トシテハ凝集作用著キモ免疫力ハ甚タ弱キコトアリ

結核菌ノ痘苗ニ就テ(三十年五月)

助手 醫學士

北 島 多 一

牛痘ノ苗田ニ供スル種ニハ往々結核ヲ病ムモノアリ故ニ結核菌ヨリ製シタル

痘苗ハ結核傳染ノ憂アリトシテ人ノ恐ル、所ナリ然レハ從來諸家ノ實驗ニ依ルニ結核菌ヨリ製シタル痘苗中ニ一回モ結核菌ヲ檢出シタルモノナク之ヲ他動物ニ接種シテ感染シタリト云フ報告モ亦甚タ稀ナリ本篇ハ北島助手ガ三頭ノ結核菌ヨリ採取シタル痘苗ニ就キ詳細ナル細菌學的檢査ヲ行ヒタル試驗報告ニシテ其成績ニ依レハ孰レモ結核菌ヲ證明スル能ハサリシ依テ痘苗ヲ接種シタル犢カ結核ヲ患フルモ其痘苗中ニハ結核菌侵入セズ隨テ該痘苗ヨリ結核ニ感染スルコトナシトノ說ヲ確ムルヲ得タリ但重症ノ結核菌ヨリ採取シタル痘苗ハ危險ナキヲ保セスト雖也如斯キ犢ヲ知ラス識ラス探苗ニ供スルノ虞ナク且豫メ獸醫ノ診斷ヲ經又ハ輕症結核ヲモ診定シ得ヘキツベルタリ注射法アリ故ニ苟モ結核ノ徵候ヲ呈スルモノハ之ヲ使用ニ供セサルノ法ヲ確守スレハ牛痘苗中結核菌混入ノ危險ハ萬々ナキコトヲ信スルヲ得タリ

馬ノ破傷風症ニ於ケル血清療法實驗第一報告(三十年四月)

助手 梅野信吉

馬ハ破傷風症ニ感シ易キ性質ヲ有スルヲ以テ自然ニ本病ニ罹ルコト多ク又本病ニ罹レハ大抵死ヲ免レス爲メニ軍馬或ハ種繼馬ノ如キ重要ナルモノヲ失フコトアルヲ以テ本症ハ獸醫ノ最モ恐ル、疾患ナリトス然ルニ博士ガベールング氏ト共ニ本病并ニ實布垓里亞ノ血清療法ヲ發見シテ以來人牀ノ破傷風ノミナラズ馬ノ同病ニ就テモ血清療法ヲ行ヒテ其果ヲ收メタルノ實驗報告アリ果シテ其果アリトセバ飼畜上ノ裨益蓋シ尠少ニアラズ本篇ハ即チ破傷風病馬ニ就キ本所ニ於テ製造シタル破傷風血清ヲ用ヒテ治療シ好結果ヲ得タル實驗報告ニシテ左ノ事實ヲ得タリ

第一 獸醫ハ此療法ヲ施スヘキ時期ニ際會スル場合比較的多キヲ以テ常ニ

此種ノ血清ヲ充分藥局ニ供ヘ置クヘキコト

第二 些少ニテモ本症ノ疑アルモノハ牀外ニ於テ創傷ノ有無ヲ檢シ若シ之

フルトキハ更ニ細菌學的検査ヲ行フコト

第三 血清ハ診斷確定後直チニ注射スヘキコト

第四 用量ハ目下本所ノ治療血清ニ就テ考フルトキハ多キモ四百立方仙迷  
ヲ超ヘスシテ可ナルヘキコト

(殊ニ靜脈内注射ノ場合ニハ更ニ減量スヘシ)

第五 靜脈内注射ヲ試用スヘキコト

第六 注射ノ時期早クレハ一週乃至二週ニシテ快復スルヲ得ヘク又少シク  
遅レタル場合ニ於テモ三週以内ニ治癒スルコトヲ得ヘキコト

### 馬ノ破傷風症ニ於ケル血清療法實驗<sup>第二報告</sup>(三十年六月)

助手 梅野信吉

破傷風病馬ニ血清療法ヲ行ヒ好果ヲ得タル實驗ハ先ニ報告スル所アリシカ本  
篇ハ再ヒ同一實驗ヲ行ヒ其効ヲ奏シタル報告ニシテ此治療ニ依リ病馬ニ血清

療法ヲ用ユルニハ靜脈内注射法ノ優レルノミナラス其施術ノ容易ニシテ且危  
險ナキコトヲ證シ得タリ

### 肺結核痰中ノ鏈鎖狀球菌及同免疫血清ノ研究<sup>(三十年七月)</sup>

都築甚之助

肺結核病ニシテ其病竈ニ他種細菌ノ混入スルコトナクハ無熱ニ經過シ又古  
弗氏ノ「ツベルクリン」モ有効ナレトモ既ニ鏈鎖狀球菌カ結核病竈ニ寄着スレハ  
熱發アリ隨テ全身ノ衰弱甚タシキヲ加ヘ死期ヲ催進スルノミニシテ古弗氏療  
法モ已ニ無効ニ歸ス故ニ若シ其鏈鎖狀球菌ヲ以テ動物ヲ免疫シ既ニ免疫シタ  
ル血清ヲ患者ニ使用シ鏈鎖狀球菌ノ有害作用ヲ防衛シ得ルトセハ實ニ肺結核  
治療法ノ一大進歩ト謂フヘシ本篇ハ即チ此目的ヲ以テ研究シタル報告ニシテ  
先ツ肺結核患者ノ喀痰ヨリ有毒ナル鏈鎖狀球菌ヲ獲取シ此培養ヲ以テ羊及家  
兔ニ免疫試験ヲ行ヒ左ノ成績ヲ得タリ

第一 肺結核痰中ニハ殆ント毎常鏈鎖狀球菌ヲ含有スルコト

第二 高熱肺結核患者ノ痰中ニハ有毒鏈鎖狀球菌ヲ含有シ動物試驗ノ成績ニ依レハ此球菌ガ結核患者發熱ノ主因トナルコト

第三 肺結核痰中ノ有毒鏈鎖狀球菌ヲ以テ動物ヲ免疫セシメ其免疫血清ヲ以テ他動物ノ同病菌ヲ防衛シ得ルコト

第四 有毒連鎖狀球菌免疫動物ノ血清ハ最後注射後三週以內ニ於テ既ニ他動物ニ免疫力ヲ附與スルカアルコト

第五 肺結核痰中ノ有毒連鎖狀球菌ハ丹毒連鎖狀球菌ト異種ナルコト

混合免疫試驗第一報告(三十年) 助手 林 長 吉

二種以上ノ病毒カ同時ニ同一身體ヲ襲ヒ所謂混合傳染ヲ發スルコトアリ斯ル場合ニ於テ其身體ハ同時ニ二病毒ニ對スル免疫性ヲ呈スルヲ得ルヤ否ヤハ學術上興味アル問題ナリトス本篇ハ即チ該問題ヲ解釋セント欲シ虎列刺菌并ニ

實布埤里亞菌培養ヲ隔番ニ同一緬羊ニ注射シテ研究シタル報告ニシテ該動物ハ二病毒ニ對シ高度ノ免疫ヲ呈シ此動物血清ハ虎列刺實布埤里亞ヲ同時ニ發病セルモノニ向ツテ用ユルモ其有効ナルヘキヲ證シ得タリ

石灰殺菌力試驗成績報告(三十年)

助手 川 地 三 郎  
全 岩 井 正 浩

石灰ハ消毒藥トシテ最モ適當セルコトハ世人ノ知ル所ナリト雖モ其品質等ニ依リ大ニ殺菌力ニ差異アルモノナリ本試驗ニ供シタル石灰ハ栃木縣安蘇郡宇片山産ニシテ吉澤丘左ノ製造ニ係リ第四回内國勸業博覽會ニ於テ有功三等褒賞ヲ授與セラレタルモノナリ然ルニ第一回送附ノ石灰ハ殺菌力不確實ニシテ之ニ反シ更ニ第二回ニ送付セルモノハ殺菌ノ効力アリシ蓋シ其第一回送付ノ石灰ハ試驗着手迄ニ久時ヲ經過シタルカ爲メ或ハ殺菌力ニ影響ヲ及ホシタルヤモ知ルヘカラスト雖モ其品質モ亦劣等ナリシカ如シ依テ產地製造業者同一

ナルモノト雖モ原料ノ精粗製法ノ良否及ヒ保存方法ノ如何ニ依リ殺菌力ニ差  
異アルコトヲ知レリ

イエルザン氏「ベスト」菌ノ免疫試験(三十年九月)

醫學士 戸塚 機知

本篇ハイエルザン氏「ベスト」菌ニ就テ爲シタル試験報告ニシテ先ツ培地上ノ生存  
期全毒力強盛ノ時期菌毒ノ所在「ベスト」免疫血清ニ對スル反應等ヲ詳檢シ次テ  
滅菌培養ヲ以テ緬羊并ニ山羊ニ皮下注入及靜脈注入法ヲ行ヒテ免疫セシメ其  
血清ノ同菌感染ヲ防衛スル力アルヲ知レリ

癩病ト結核ノ混合感染例(三十年十月)

助手 村田 昇清

本篇ハ本所ニ於テ治療セル癩病患者二百餘名ニ就テ肺結核ヲ合併セル患者四  
名(内三名ハ死後解剖ヲ行ヒタリ)ニ就テ詳細ナル細菌學的検査ヲ施シ之ヲ確證  
シタルモノナリ

肺壞疽病原ノ探究第二報告(三十年十一月)

助手 築山 揆一

本篇ハ曩キニ報告シタル肺壞疽患者ヨリ得タル細菌ト同一ノモノヲ再ヒ同症  
患者ノ喀痰ヨリ獲取シテ更ニ詳細ナル細菌學的検査ヲ行ヒタル報告ニシテ此  
實驗ニ依リ該菌ハ出血性敗血症菌ニ屬スルモノ、如ク又家兎ニ接種スレハ肺  
壞疽ヲ喚起スルモノナルヲ知レリ

赤痢病々原研究報告(三十年十二月)

助手 醫學士 志賀 潔

赤痢病ハ本邦ニ流行スル傳染病中最モ恐ルヘキモノニシテ官民共ニ之レカ撲  
滅ノ方法ヲ講スルモ未タ曾テ著明ノ効績ヲ得ス其理由ハ畢竟赤痢病々原ノ不  
明ナルニ在テ存ス故ニ今若シ其病原ヲ發見スルアラシカ、以テ個人的豫防ノ全  
備ヲ得ヘク、病機頓挫ノ療法ヲ案出シ得ヘク、又完全無缺ノ撲滅策ヲ講スルヲ得  
ン故ニ本所ニ於テハ從來之レカ研究ニ從事シ居タリシカ會々三十年ノ夏ヨリ  
冬ニ亘リ我東京府下ニ本病ノ流行アリタルヲ以テ博士ハ本所ニ同患者ヲ收容

シ志賀助手ヲシテ赤痢病患者ノ排泄物中ニ存在セル細菌中學理上赤痢病々原ト認ムヘキ細菌ノ存否并ニ其檢索ノ方法トシテ所謂ウイダール氏反應ヲ呈スル細菌アリヤ否ヤニ就テ研究ノ任ニ當ラシメシニ同助手ハ果シテ一種特異ノ桿狀菌ヲ發見シタリ本篇ハ之レカ研究成績ヲ詳細ニ報告シタルモノニシテ其概容并ニ意見左ノ如シ

- 第一、三十四名ノ急性赤痢患者ノ糞便及二名ノ同患者ノ腸壁腸間膜線等ヨリ培養ヲ行ヒ每常欠クエトナキ一桿菌ヲ得タリ
- 第二、本菌ハ獨リ赤痢患者ヨリノミ之ヲ發見シ他ノ患者及健康豚ノ排泄物中ニハ決シテ存在セス
- 第三、本菌ハ赤痢患者快復後ノ血清ニ對シテ明カニ凝集反應ヲ呈ス
- 第四、本菌ハ健康豚及ヒ他ノ患者ヨリ得タル血清并ニ諸種ノ治療血清ニハ凝集反應ヲ呈セス

第五、赤痢患者ノ排泄物及其腹壁等ヨリ本菌ノ外赤痢患者ノ血清ニノミ凝集反應ヲ呈スルモノヲ發見セス

第六、本菌ヲ「モルモツト」ノ腹腔ニ注射スレハ腸内出血ヲ見ルコト稀ナラス小腸及盲腸壁ニハ溢血ヲ生ス皮下ニ接種スレハ強キ滲潤ヲ起シ日ヲ經ルモノハ其中央部ヨリ膿性トナル兔ノ皮下ニ接種スルモノ之レト同シ

犬ノ胃中ニ本菌ノ培養ヲ送入スレハ粘液便ヲ泄シ小腸ノ壁ニ溢血ヲ呈ス猫ノ胃中ニ送入スレハ粘液便ヲ泄ス

第七、人豚ノ皮下ニ六十度ノ温ニテ殺菌セル本菌ノ培養ヲ接種スレハ局所滲潤ヲ發シ熱ヲ伴フ而シテ人豚ニ於ケル感受性ハ他ノ動物ニ比シテ頗ル強大ナリ

第八、以上ノ性質ニ因リテ本菌ハ學術上赤痢病原トシテ誤リナキヲ信ス故

ニ名ツケテ赤痢菌 *Bacillus dysenteriae* ト曰フ

第九 赤痢菌ノ培養ヲ以テコルレ氏法ニ倣ヒ豫防接種ヲ行フヲ得ヘシ

第十 赤痢菌ヲ以テ動物ヲ免疫セシメ以テ其培養血清ヲ製スルヲ得ルニ至ルヘシ

### 各種治療血清ノ製造

二十九年七月内務省血清藥院ノ創立ニ際シ曩ニ本所ニ於テ成功シタル實布埤里亞治療血清製造ノ事業ト免疫シタル動物トハ共ニ之ヲ全院ニ引繼キタリ而シテ此實布埤里亞ノ外本所ニ於テ治療血清製造ノ爲メ動物ニ人工免疫法ヲ施シツ、アルモノハ左ノ如シ

- 一 虎列刺治療血清製造ノ爲メ馬、羊及山羊ノ免疫ヲ繼續シツ、アルコト
- 一 破傷風治療血清製造ノ爲メ馬及羊ニ免疫法ヲ繼續シ同病患者ニ接スル毎ニ之ヲ應用シツ、アルコト

一 腸室扶斯治療血清製造ノ爲メ驢馬及馬ニ免疫法ヲ實施シ且進ンテ患者ニ實驗シツ、アルコト

一 肺結核治療血清製造ノ爲メ馬及羊ニ免疫法ヲ實施シ且之ヲ患者ニ實驗シツ、アルコト

一 肺炎菌ヲ以テ動物免疫法ヲ實施シツ、アルコト

一 丹毒及之ニ類スル病原的連鎖球菌ヲ以テ羊及山羊ニ免疫法ヲ實施シツ、アルコト

一 「ベスト」菌ヲ以テ馬及羊ニ免疫法ヲ實施シツ、アルコト

### 古弗氏新「ツベルクリン」ノ製造

新「ツベルクリン」ハ三十年四月古弗氏ノ公ニシタル結核治療藥ニシテ之レヲ患者ニ施スニ反應少ナク且ツ治効ニ併セテ豫防ノ効力アルヲ以テ從來ノ「ツベルクリン」ニ比シ甚タ優レルモノナリ本所ニ於テハ氏ノ報告ニ接スルト同時ニ原



品ヲ以テ實際患者ニ應用セシニ其効驗ノ著ルシキヲ認メタリ但本品ハ頗フル高價ニ屬シ普ク使用スルコト困難ナルヲ以テ本所ニ於テ之レヲ製造セント欲シ之ニ要スル諸器械ヲ獨逸國ニ注文中ナリ

### 癩病ニ關スル研究

癩病ハ亞細亞地方ニ最モ多キ疾病ニシテ本邦ニ於テモ各地到ル處トシテ本患者アラザルハナシ往時本病ハ血統ニヨリテ遺傳スルモノト思惟セシガ細菌學ノ進歩ハ其病原トシテ特異ノ細菌ヲ發見シ本病亦タ一ノ傳染病ナルヲ知得シタリ然レモ動物試驗ニヨリテ其傳染力ヲ證明スルコトハ海外ノ學者屢々之ヲ試ミテ每常失敗セシニモ拘ハラズ博士ハ二十五年歸朝以來孜孜トシテ本病ノ研究ニ從事シ遂ニ動物ヲシテ癩病ニ感染セシムルコトヲ得タリ又其治療法ニ至リテモ往古ハ不治ノ症ト見做シ天刑病ナル醜名ヲ付シタルニ拘ラズ博士ハ人工免疫法ノ理ニ基キテ一種ノ治療液ヲ製出シ之ヲ患者ニ應用シテ今日ニ至

レリ目下本所ニ於テ使用スル「レブリン」是ナリ但シ本件ニ關シテハ別ニ報告ヲ發スベキヲ以テ茲ニハ梗概ヲ記スルニ過ギズ

右ノ「レブリン」ヲ用ヰテ二十七年二月ヨリ三十年十二月ニ至ルマデ治療シタル癩病患者ハ合計二百二十三人内全治四人全治ニ近キモノ及ヒ歲餘ヲ出スシテ全治ノ見込アルモノ十五人死亡三人ニシテ餘ハ多ク快方ニ向ヒツ、アリ而シテ死亡者三人中二人ハ共ニ結核ヲ併發シ一人ハ脚氣ヲ併發シタルモノニ係ル抑ミ本病ノ如キ慢性ノ經過ヲ取ルモノニ在テハ患者ハ醫士ト共ニ充分ノ忍耐ヲ有セザル可ラズ故ニ本所ハ患者ノ忍耐ニ故障ナカラシメンガ爲メ治療ノ制ヲ設ケタレドモ尙ホ且種々ノ係累ヲ生シ全治ニ至ルマデ治療ヲ持久スル能ハザル者アルハ遺憾ナリ

本所ニ於テ全治ト稱スルハ結節、麻痺、潰瘍等盡ク故ニ復シ且身體中癩病菌ヲ檢出スルコト能ハザルニ至リタルノ謂ニシテ病菌ノ存スル間ハ爾餘ノ症狀如何

ニ快癒スルモ之ヲ全治ト稱スルコトナシ

### 狂犬病ニ關スル研究

本病ハ最モ多ク犬ニ發スル特異ノ傳染病ニシテ狐狼馬猿牛羊豚猫鼠鷄鳩等ノ動物及人類モ亦之ニ犯サル皆嘗テ本病ニ罹レル獸多クハ犬ヨリ咬傷セラレテ發スルモノナリ而シテ犬ノ本病ヲ發スルヤ其症狀ニ躁性ト靜性トノ別アリ潜伏期ハ通常三四週ニシテ躁性ノモノハ先ヅ其性質ニ變常ヲ現ハシ食機振ハズ木屑竹片毛髮等ヲ食ヒ既ニシテ狂暴益々募リ目ニ觸ル、モノハ其ノ何タルヲ問ハズ之ヲ咬ム人及他獸ノ咬傷セラル、モ多クハ此時期ナリ途ニハ麻痺ノ狀態ニ陥リ時々痙攣ヲ發シ譫妄シテ死ニ至ル靜性ニアリテハ狂暴セズ麻痺シテ死ス他ノ動物ニテモ其ノ症狀多クハ犬ト相似タリ人類ニ於テハ最モ慘憺タル症狀ヲ呈シ水藥液等凡ベテ液體ヲ恐ル、ノ狀甚ダ特異ナルヲ以テ一ニ恐水病ノ名アリ而シテ多クハ數週稀ニハ數月數年ノ潜伏期ヲ經テ一タビ發病スルヤ

數日ニシテ殆ソト皆死ヲ免レズ然ルニ茲ニパスツール氏ノ豫防接種法ナルモノアリ其法狂犬病ヲ發セル犬ノ腦髓ヲ反復家兎ノ硬腦膜下ニ轉移シ毒性ノ甚ダ強劇トナルニ至リ之レカ爲メニ斃レタル家兎ノ脊髓ヲ剖出シ苛性加里ヲ以テ適度ニ乾燥シテ毒性ヲ減弱セシメ而シテ先ヅ全ク毒性ノ滅盡セルモノヨリ漸次毒性ノ強力ナルモノヲ乳劑トナシ之ヲ狂犬ニ咬マレテ未ダ發病セサルモノ、軀中ニ注射スルニアリ之ニヨリテ以テ能ク其發病ヲ豫防シ得ベシ

三十年ノ夏東京府下及近縣ニ狂犬ノ發生スルアルヤ本所ニ於テハ直ニ之ガ研究ニ着手シ善良ナル接種苗ヲ製シテ所謂パスツール氏ノ豫防接種法ヲ行ヘリ即チ七月下旬ヨリ十二月末日ニ至ルマテ犬ニ咬マレテ本所ニ診療ヲ乞ヒシモノ都テ六十四名ノ中咬マレタル犬ノ確カニ狂犬ナリシヲ認メテ豫防接種ヲ行ヒシモノ十名疑ハシキ犬ヨリ咬傷ヲ受ク萬一ノ發病ヲ慮リテ豫防接種ヲ行ヒシモノ十四名合計廿四名府下十四名神奈川縣五名長野縣群馬縣各二名栃木

縣一名)ニシテ尙他ニ接種法ヲ完結スルニ至ラズ中途ニシテ廢止シタルモノ二名アリキボルリソグエル氏ノ統計ニ從ヘバ狂犬ニ咬マレテ發病スル數ハ全ク處置ヲ施コサ、ルトキハ八十三%咬傷部ノ腐蝕療法ヲ加ヘタルモノハ三十三%バストール氏ノ法ヲ行ヒシモノハ僅カニ〇・二乃至〇・三%ナリト云フ然ルニ本所ニ於テ接種法ヲ受ケタルモノハ幸ニシテ未タ一人ノ發病シタルモノナシ目下現ニ接種法施行中ニアルモノ尙一名アリ

本病ノ病原タルベキ有機ニ存在スルコトハ業ニ已ニ一般ニ承認セラレ其所在ハ明カニ腦脊髓腫腺等ナルコトヲ知り豫防ノ方法モ亦タ前ニ述ヘタル如クバストール氏ノ法ナルモノアリト雖也今日ニ至ルマデ未ダ其病原ヲ發見シ培養ヲ成功シタルモノナシ是ヲ以テ接種法ニモ作業上ノ困難鮮ナカラズ加之更ニ一步ヲ進メテ既ニ發病セルモノモ治療シ得ルノ域ニ達スルコト難シ本所ニ來リタル既ニ發病セル二名ノ患者ノ如キモ百方手ヲ盡シタルニ拘ハラズ何レモ數

時間ニシテ死ニ歸セリ本所ニ於テハ大ニ茲ニ見ル所アリ今ヤ病原ノ研究ニ努メツ、アレバ將サニ他日ヲ待テ報告スル所アルヘシ

此等ノ研究ニ就テハ博士指導ノ下ニ助手田代豊助ヲシテ専ラ之ニ從事セシメ居レリ

### 研究會

本所ハ毎月一回所員及在京ノ研究生ヲ集メテ研究會ヲ開キ斯學研鑽ノ一助ニ供セリ

### 第四 患者

明治二十七年二月十七日日本所附屬病室開設以來三十年十二月三十一日マデニ收容シタル患者ハ合計二千五百三十九人ニシテ内全治退室二千二十六人、輕快退室百二十二人、轉地又ハ事故退室六十四人、死亡二百九十四人、在室三十三人ナリ

抑モ本所病室ハ當初五十人ノ入室患者ヲ目的トシテ建設シタルニ過キス之レニ

各種ノ傳染病患者ヲ收容シテ病原ノ檢索治療ノ研究ニ資セント料リシニ實布埜里亞血清療法ヲ新施セシ以來患兒ヲ擄ヘテ入室ヲ乞フモノ日々數名ニ上リ病室ノ大部分ヲ擧ゲテ同病患者ニ供セシガ故ニ腸室扶斯丹毒赤痢破傷風ノ如キ他ノ傳染病患者ヲ多ク收容スル能ハサリシハ遺憾ニ堪ヘサルヲ以テ沿革ノ章ニ述ヘタルカ如ク三十年十二月以來ハ新タニ隣地ニ借入レタル建物ヲ充用シ病室ノ缺乏ヲ補足スルコト、ナセリ

收容シタル各種患者ノ内本所特殊ノ療法ニ係ル三四ノ病症ニ就キ其治療ヲ畧記スレハ左ノ如シ

#### 腸室扶斯

本病患者ノ總數ハ次表ノ如クニシテ二十八年十二月迄ハ腸室扶斯菌ノ生産物ヲ注入シテ解熱ヲ速カニシ豫後ヲ善良ナラシメシモ未タ満足ナル治療法ト稱スルヲ得サリシカ二十九年一月以降ハ該菌ノ生産物ヲ以テ動物ヲ免疫シ其動

物ヨリ強力ノ免疫血清ヲ得患者ノ治療ニ應用シテ奏効ノ確實ナルヲ認メタリ是レ實ニ本病治療法ノ一大進歩ト言ハサルヲ得ス

本病ノ經過ハ通常三四週乃至五六週間ヲ經幸ニ治ニ就クモ體力恢復ニハ猶數ク月ヲ要スルモノアリ然ルニ本病患者ニ血清療法ヲ行ヘハ注射後二日乃至四日ニシテ熱候弛張性トナリ三四日ヲ經テ全ク平温ニ復シ敢テ體力ノ減衰ヲ來スコトナシ故ニ本病ノ初期ニ血清療法ヲ施セハ決シテ不良ノ轉歸ヲ取ルモノナキヲ信ス

#### 破傷風

本病ハ古來汎ク知ラルト所ノ創傷傳染病ニシテ人躰及動物ノ之レニ侵サル、アレハ一二ノ姑息療法ニ依頼シテ自然ノ經過ヲ待ツノ他根原的療法アラサリシ然ルニ本病ノ血清療法ハ免疫原理ニ基キタル唯一ノ治療法ニシテ又實ニ血清療法ノ濫觴ナリ即チ該療法ハ博士カ嘗テ獨逸國ニアリタル日研究シタル所

ニシテ本所ノ設立以來動物ノ免疫ニ從事シタリシガ終ニ二十八年以來患者ニ  
應用シテ好結果ヲ得且本病ニ罹レル動物ニ注射シテ成績ノ佳良ナルヲ認メタ  
リ

丹毒

本病モ亦創傷傳染病ノ一ニシテ之レカ爲メ從來屢々外科手術ノ轉歸ヲ不良ナ  
ラシメタルモノナルガ本所ハ一種ノ治療液ヲ製シ之ヲ患者ニ施シ爾來益々良  
好ノ成績ヲ得遂ニ該病ニ對スル特異療法タルヲ確認スルニ至レリ

實布埜里亞

本病血清療法ノ其果ハ已ニ世ニ周知セラレ居ル所ナルヲ以テ茲ニ詳記スルノ  
要ナシ故ニ單ニ其成績ヲ摘記スレハ入室シタル患者總數二千八百八人ニ對シ死  
亡二百二十一人ナルヲ以テ患者每百人ノ死亡比例ハ一〇・四八ニ當レリ  
又實布埜里亞治療血清ヲ以テ健兒又ハ同病類似症患者ニ豫防注射ヲ施シタル

モノ合計四百二十二入アリ

自明治二十七年二月十七日  
至同三十年十二月卅一日

傳染病研究所附屬病室入室患者成績表

病名	入室患者	全治退室	輕快退室	轉地退室	死	亡	在室患者
結核症	一九四	六	九六	三	二七	一三	一九
實布埜里亞	二、一〇八	一、八六五	八	五	二二	一	一
癩	一五	二	一	一	六	一	一
腸室扶斯	三二	二五	一	一	二	一	一
梅毒	八	五	一	一	二	一	一
丹毒	九	九	一	一	一	一	一
破傷風	二	九	一	一	二	一	一
赤痢	三九	三一	一	一	八	一	一
再歸熱	一四	二	一	一	二	一	一



### 第五 研究生

研究生ノ制規ハ細菌學及傳染病學ノ普及發達ヲ謀ランカ爲メニ設ケタルモノニシテ明治二十七年三月內務大臣ノ認可ヲ經タリ而シテ斯學研究ノ事タル其大成ハ固ヨリ長日月ヲ要スヘキニヨリ先ツ一研究期ヲ三ヶ月間トシ以テ其大要ヲ知得セシメ尙各自ノ希望ニヨリ二期以上ノ繼續研究ヲ許スコト、ナセリ其規則左ノ如シ

#### 傳染病研究所研究生規則

- 第一 傳染病研究所員外ノモノニシテ當所ニ於テ細菌學ノ實地研究ヲナスモノヲ研究生ト稱シ研究室ノ都合ニヨリ之ヲ許ス
- 第二 研究生タラントヲ望ム者ハ別紙甲號書式ニヨリ履歷書ヲ添ヘ當所ヘ願出ツヘシ但內務省ノ醫術開業免狀ヲ有スルモノニ限ル
- 第三 研究生出願者ニシテ其許可ヲ得タルモノハ別紙乙號書式ノ誓約書ヲ當

#### 所ニ差出スヘシ

- 第四 研究生ノ研究期ハ三ヶ月トス但本人ノ望ニヨリ尙其時期ヲ延長スルコトヲ得
  - 第五 研究生ハ自費ヲ以テ顯微鏡其他研究上必要ノ器具及消耗品ヲ購入使用スヘシ
  - 第六 研究生ハ前條費用ノ外別ニ一研究期謝金拾圓ヲ納付スヘシ
  - 第七 研究生ニシテ當所ノ牀面ヲ毀損スヘキ所爲アルモノハ退所ヲ命スルコトアルヘシ(書式略)
- 而シテ其初メニ當テハ教室ノ都合上毎回ノ研究生多キモ五六名ヲ容レシニ過キサリシカ二十八年三月衆議院議員土居光華、重岡薫五郎ノ二氏ハ左ノ建議案ヲ同院ニ提出セラレタリ
- 大日本私立衛生會設立傳染病研究所ニ撰拔研究生ヲ置クノ建議

凡ソ人間社會ニ慘毒ヲ流ス者枚擧ニ遑アラスト雖モ其最モ甚シキヲ傳染病ト  
 ス今試ニ其概況ヲ列擧セハ明治二十七年中六種傳染病患者合計二十一萬百九  
 十八人其内死亡五萬二千七百三十二人二十五年中肺病患者ノ死亡五萬八千三  
 十三人就中赤痢病ノ如キハ明治九年ヨリ二十七年ニ至ル迄總計患者六十七萬  
 七千九百六十四人其内死亡十六萬二千四百九十一人ノ多キニ上リ其流行年一  
 年猖獗ヲ極メ今ヤ尙ホ西南諸州ヨリ東北地方ニ進入セントシ其勢恰モ原ヲ熾  
 クガ如ク其慘酷實ニ名狀スヘカラス若シ不幸ニシテ虎列刺病ノ如キ傳染病ノ  
 襲來センカ一擧シテ十六七萬人ヲ斃スヘキハ從來ノ流行ニ徴スルモ明カナリ  
 夫レ斯ノ如ク直接ニ人命ヲ損シ間接ニ殖産工業上ニ至大ノ關係ヲ來スヘキ傳  
 染病ニ對シ之カ豫防救治ノ方策ヲ講スルハ衛生上ヨリ論スルモ國家經濟上ヨ  
 リ觀察スルモ今日ノ急務タルヤ固ヨリ論ヲ竣タサルナリ故ニ政府ハ先ツ其ノ  
 第一策トシテ獨逸ニ於ケル古弗民ノ傳染病研究所佛國巴里ニ於ケル傳染病研

究所ノ例等ニ倣ヒ北海道廳長官府縣知事ヲシテ其管下公私立病院及開業醫ヨ  
 リ若干名ヲ撰拔シ大日本私立衛生會設立傳染病研究所ニ就キ各種傳染病ノ豫  
 防救治ノ方法ヲ傳習セシメ一ハ以テ豫防救治ノ要衝ニ當ラシメ一ハ以テ行政  
 衛生ノ機關トナラシムルノ方法ヲ設ケラルヘシ然ルトキハ各種傳染病ノ撲滅  
 ニ對シ大効力アルヘキハ斷シテ疑ヒテ容レサル所ナリ茲ニ之ヲ建議ス  
 此建議ハ全月十八日ノ議事ニ於テ多數ノ賛成ヲ得遂ニ政府ニ提出セラレタル結  
 果内務大臣ハ衛生局長ヲシテ左ノ如ク私立衛生會ニ通牒セシメラレタリ  
 貴會設立傳染病研究所ニ選拔研究生ヲ置クノ件ニ關シ衆議院ヨリ建議ノ次第  
 モ有之一應北里所長ヘ協議ノ上別紙ノ通各地方官ヘ申牒俟間全所長ヘ可然御  
 通達相成度此段申進候也

明治廿八年四月十六日

内務省衛生局長高田善一

大日本私立衛生會頭子爵土方久元殿



(別紙)

微菌學ノ醫學上ニ緊要ナルハ今更喋々ヲ要セサルノミナラス斯學ノ普及ハ國家衛生上ニ裨益不少義ト存候幸ニ傳染病研究所ニ於テハ己ニ昨年以來別紙ノ規則ヲ設ケ一期凡五六名ノ入所研究ヲ許シ來リ候處今後一層研究生養成事業ヲ擴張シ二十名位増員候モ差支無之候ニ付貴管下當業者ニ於テモ可成該所ニ就キ研究候ハ、一ハ自家業務擴張ノ基礎トナリ一ハ地方傳染病ノ豫防救治上裨益不少義ト存候間可然御勸誘相成候様致度承旨此段申進候也

明治廿八年四月十七日

内務省衛生局長高田善一

北海道廳長官府縣知事宛

追テ詳細ノ手續等ハ該研究所長へ直接御打合相成度此段添テ申進候

一方ニ於テハ右ノ勸誘アリタルト一方ニ於テハ血清療法ノ好評噴々タルトニヨリ爾來研究生ノ入所ハ頓ニ其數ヲ増加セルヲ以テ當所ハ別ニ隣地ノ家屋ヲ借入

レ之レカ教室ニ充用スルニ至レリ

今第一回(二十七年三月)ヨリ第十三回(三十年十二月)マテノ研究生ヲ地方別ニ表示シ尙其姓名ヲ掲グレハ左ノ如シ

研究生地方別表

北海道廳	四人	東京府	四八人	京都府	三人
大阪府	七	神奈川縣	五	兵庫縣	二
長崎縣	七	新潟縣	四	埼玉縣	五
群馬縣	八	千葉縣	二	茨城縣	一
栃木縣	四	奈良縣	一	三重縣	五
愛知縣	七	静岡縣	一一	山梨縣	三
滋賀縣	二	岐阜縣	五	長野縣	一三
宮城縣	九	福島縣	二	岩手縣	五

青森縣	五	山形縣	七	秋田縣	五
福井縣	六	石川縣	三	富山縣	一三
鳥取縣	一	島根縣	九	岡山縣	三
廣島縣	五	山口縣	六	和歌山縣	一
德島縣	三	香川縣	九	愛媛縣	一
高知縣	四	福岡縣	一四	大分縣	七
佐賀縣	二〇	熊本縣	一	宮崎縣	一
鹿兒島縣	五	沖繩縣	一	臺北縣	一
二回繼續者	二七	合計	三一八		
研究者姓名					
鈴木篤三郎	安尾	清治	關島	琴四郎	九
遠城兵造	井上	慶治	(以上第一回)	關根	東之亮

町田	鍊之助	井爪	瓦平	戶田	成年	安元	傳
(以上第二回)	遠藤	滋	榎本	文四郎	(以上第三回)		
朝永安	五郎	伊東	祐彦	山下	翼	稻田	宣四郎
與田	道有	(以上第四回)	金田	西一	右田	力太郎	
長船	鑽治	佐々木	節三	(以上第五回)	須藤	鑽作	
原	竹造	高橋	軍平	鶴飼	謙作	丸山	巖太郎
紺野	吉彌	上村	行彰	峯守	太郎	柏村	貞一
森	三木	佐多	愛彦	(以上第六回)	木村	宗光	
天野	俊彦	甲田	英勝	安田	則人	岩田	善太郎
藤原	道雄	目黒	能次郎	鈴木	萬次郎	加藤	澄
仙場	必強	澁谷	周平	岡部	喜三	河合	利正
野松	順太郎	石須	直次郎	板谷	一雄	杉村	廉

佐多愛彦 (以上第七回) 伊藤正孝 稻見春之助  
 池上延二郎 蜂屋元壽 波多江安吉 鳥原重義  
 德永竹二郎 大竹岳陽 大崎從舜 岡田次太郎  
 奧貫恭助 小澤雄太郎 片山德治 賀川玄吾  
 金子直躬 金木三郎 桂秀馬 勝木直吉  
 依田悌三郎 吉富四郎 吉富實 吉田周甫  
 吉田弘谷 山口長雄 田中正義 竹山屯  
 高橋種紀 原親雄 高桑文雄 高平長卿  
 露木覺 納富嘉太郎 並河榮三郎 六車謙三郎  
 上野璋 氏家俊次郎 窪田房吉 矢野靜哉  
 山方喜太郎 前田魯平 松原金吾 松村主馬  
 間宮珪雄 古川俊 小穴甫吉 深町荒雄

寺田閨三 荒田博 淺野泰仲 佐藤秀吉  
 佐藤秀彦 北澤玄仲 光吉俊治 三宅猶之丞  
 森口謙哉 仙場必強 杉山長英 (以上第八回)  
 市川定靜 石川清忠 伊藤脩 畑榮太郎  
 濱田政壯 西野廉一 西山秀次郎 本多政通  
 鳥海恭寬 長田伊佐 大峽荒治 大橋九十郎  
 尾畑強兵 大申彦五郎 大山茂 勝田茂策  
 片淵造酒太郎 吉澤運之助 吉田之長 田代豐助  
 竹村吉次 高橋長俊 長登廣治 中島秀一  
 村尾信雄 梅田龜野 副主一 山本兼孝  
 山口皓一 結緣宗吉 船越傳 小塚喜納  
 淺田繁太郎 荒牧國衡 佐久間延二 菊地音之助

白水	玄山	鈴木	辰海	原親	雄高	桑文	雄
佐藤	秀吉	高平	長卿	淺野	泰仲	片山	德治
深町	荒雄	小穴	甫吉	岡田	次太郎	寺田	閔三
高橋	種紀	松村	主馬	(以上第九回)			飯島
井上	遠生	島倭	三郎	長谷川	恒次	西尾	重
西田	貞吉	西村	藥磨	大橋	純	大河原	健藏
岡村	利平	尾崎	卯一	和田	文造	加納	平策
笠松	立二	甲斐	甲子郎	吉田	驪一郎	竹田	要造
永濱	萬吉郎	中村	平輔	中野	醇	長町	耕平
中江	佐八郎	中島	範造	梅田	龜	牛島	晚成
野村	虎長	梁井	直太郎	山口	靜衛	松藤	彦四郎
松島	朗	藤田	良策	安藤	藤次郎	菊池	好

三原	慶次郎	水野	元吉	清水	武文	森	三造
(以上第十回)							
川上	倭香	田村	茂實	林	彦司	西本	達郎
堀川	彌太郎	土岐	龍太郎	大前	元榮	桂	重恭
片桐	重明	金澤	銃太郎	葛西	謙三	高谷	健次郎
辻儀	之中	桐修	炳中	村	晋	永井	信賢
村上	信定	上田	久太郎	野田	五郎	山谷	德治郎
松原	朋三	正見	伊三郎	幕田	寅之助	福島	猪十郎
後藤	田鶴雄	寺本	德太郎	安藤	準平	安東	謙三
有賀	立雄	淺野	虎三郎	有馬	利德	阿久津	隆造
吉川	靖	峯源	次郎	三井	清	三上	剛太郎
下坂	禮吉	白木	五百松	清水	幹	平野	省吾

平井	成東	藤三郎	本島綾三郎	陶	燕
(以上第十一回)	林彦司	中村	晉福島猪十郎		
寺本德太郎	白木五百松	下坂禮吉	速水實忠		
西田鎌太郎	近田育平	大北武彦	加藤勝		
加藤正澄	金野久平	横山	新横山清二郎		
吉田彦策	谷峰太郎	高橋堅彌	中村貞正		
長岡英藏	永淵英晃	武藤留之助	黒川一郎		
久布白兼徳	山田泰二	丸田喜助	金		
小林仲次郎	是川述造	幸丸敏雄	小柳彦治		
後藤英三郎	江口壯三	荒牧吉彦	天見民恵		
佐藤忠美	佐川銚藏	齋木亮熊	木村武夫		
木内叔三郎	湯川守三郎	宮川久平	三宅幾重		

三宅武雄	三科宗橘	菅井桂之助	季村常八
兵藤玄武	朝山勘一	堀内次雄	
(以上第十二回)	近田育平	久布白兼徳	小屋光雄
伊藤龜治郎	林芳太郎	林直吉	大久保友之助
岡田柯一	小澤傳八郎	玉木爲三郎	武田賢齋
副島太郎	中川幡之輔	上田計二	日下部道齋
久留春三	松岡玄雄	松本格之輔	福原道太郎
小池豊平	小沼東逸	出口正秀	齋藤正雄
三宅彌之次郎	三澤延治郎	鈴森賢司	(以上第十三回)

此他横濱山手英國海軍病院長ハーバート、タッドハ二十九年四月以降數月間横濱米國海軍病院醫師ポール、フヒツシモンスハ三十年一月以降數月間各本邦駐劄自國公使ヲ經テ内務省ニ依頼シ本所ニ來リテ細菌學ノ研習ニ從事シタリ

傳染病研究所一覽終

附録

寄附金品目録

此目録ハ明治二十五年十一月三十日以來三十年十二月マテ本所へ寄附セラレタル金品ヲ列記シタルモノナリ

員額	寄附者氏名	員額	寄附者氏名
金貳拾圓	森田 源右衛門	金壹圓	高澤 元俊
金百圓	下村 善右衛門	金貳拾圓	増子 永圖
金貳拾圓	全藤 仙節	金壹圓	江口 利三郎
金拾圓	後中 奎次郎	金拾圓	江、三、ス、ハッパ
金五拾圓	城島 逸齋	金百參拾七圓貳拾錢	佐伯 理一郎
金百壹圓	小林 桂助	金壹圓參拾錢	外 百五名
金拾圓	田邊 信六	金貳拾圓	吉川 熊一郎
金壹圓	山口 北部醫會		
	島津 復		

千葉縣望陀、周准、天羽郡部醫會

金四拾圓五拾錢	私立衛生會埼玉支會	金壹圓	關口昭知
金貳圓	井上徳玄	金參圓	宮澤直次郎
金壹圓	相澤貞恂	金貳圓	萩原賢明
金壹圓五拾錢	廣瀬俊吉	金五圓	村田堯康
金五圓	莊田宋仙	金拾圓	廣部清兵衛
金貳圓	守矢玄醫	金壹圓	池谷清吉
金貳圓	武田三達	金拾圓	玉井松代
金拾五圓	岸本浪太郎	金壹圓	玉井松代
金參拾四圓拾五錢	熊谷直次郎	金貳圓	高野端示
金五拾圓	宮崎聯合醫會	金壹圓	吉野ライ
金五圓	佐藤タマ	金壹圓	野口カツ
金拾圓	馬場増吉	驢馬壹圓	清岡邦之助
金貳圓	澤村音吉	金參圓	井高三郎
金壹圓	川井兵吉	金參圓	齋藤敏
			荒島正雄

モルモット七頭	前田謙齋	金五圓	佐々木節三
金拾圓	大橋文彌	顯微鏡覆硝子壹個	高橋軍平
金壹圓	小川祐次郎	金五圓	矢崎和一
金五圓	多崎幸七	金五圓	高橋健三
金壹圓	佐々木進	金百圓	多木豊次
金貳圓	渡邊利三郎	金拾圓	杉村廉
金拾圓	柏村貞一	金貳圓	アーサー、ロイド
金五圓	木村喜傳次	金參圓	眞野喜久平
金壹圓	幕田寅之助	金拾圓	田健次郎
金五圓	吉田久治	金貳圓	望月恵作
用水消毒釜壹個	遠城兵造	金拾圓	ウードゥオルス
緬羊參頭	竹村慶也	金拾圓	丸山傳兵衛
金五圓	長谷部輝雄	金貳圓	西田貞吉
金五圓	平井信悌	金五圓	五十嵐サダ

モルモット拾頭	築山揆一	金五圓	山岸喜三郎
金五圓	井上清兵衛	金參圓	吉田卓爾
金參圓	東善次	金拾圓	河島マツ
金貳圓	小川ハル	金參圓	黒岩源十郎
金拾圓	白杉政愛	金五拾圓	エチ、タツド
モルモット拾頭	松原金吾	金拾圓	高原淳次郎
金五圓	小泉金次郎	金五圓	石井幸吉
金拾圓	伯爵島津忠亮	金貳拾五圓	阪元俊一
金五圓	ヒ、グルス	金五拾圓	ボイル、フエツシモンズ
金參圓	佐藤秀彦	モルモット參頭	間宮珪雄
金拾圓	平岡潤	輕便消毒燈壹個	田原良純
金參圓	平田榮輔	金拾圓	井上善次郎
金壹圓五拾錢	原平藏	金參圓	石津平七
金五圓	林田龜太郎	山羊壹頭	大塚録四郎

金拾圓	原口謙爾	金五圓	黒田虎太郎
金拾圓四拾錢	第十一回研究生一同	金五圓	吉松直枝
馬壹頭	英國公使館 ピ、コック	金壹圓五拾錢	土屋佐吉
金拾五圓	鈴木一作	金壹圓	小川某
金貳拾圓	中山二位局	金五圓	松平義守
金五圓	エ、ド、ウ、オ、ル、ス	以上	
金壹圓	島田濟		
金貳拾五圓	武田正雄		
金壹圓	林光藏		
解卵器壹個	後藤節藏		
金七圓六拾四錢	第十二回研究生一同		
金拾圓	新木新作		
金參拾圓	久布白兼徳		
金拾圓	岩崎友次郎		



明治三十一年二月十二日印刷  
全 年二月十五日發行

非賣品

東京市芝區愛宕町二丁目十三番地

著作兼發行者 傳染病研究所

右代表者

東京市麴町區畢町五番地

吉澤環

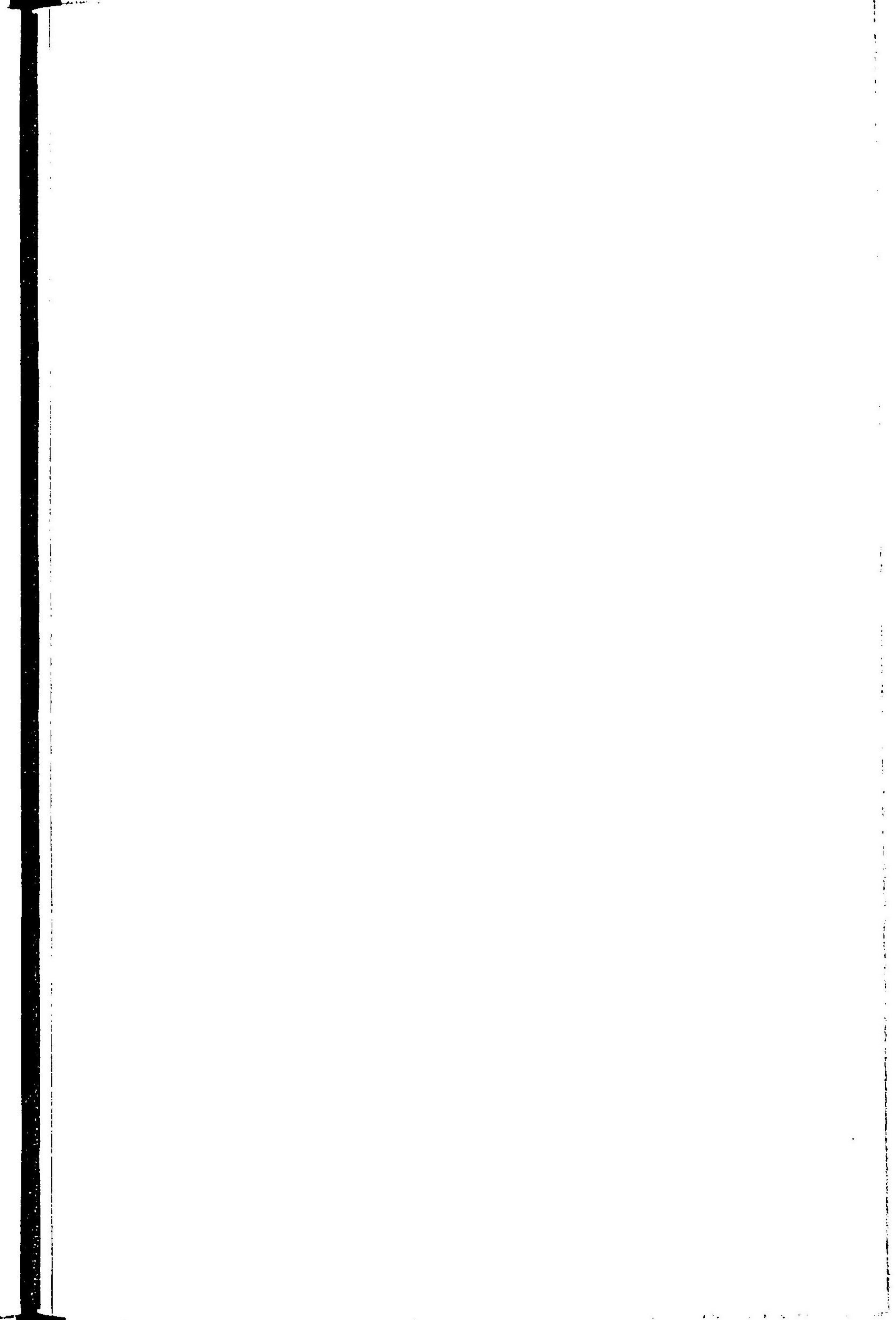
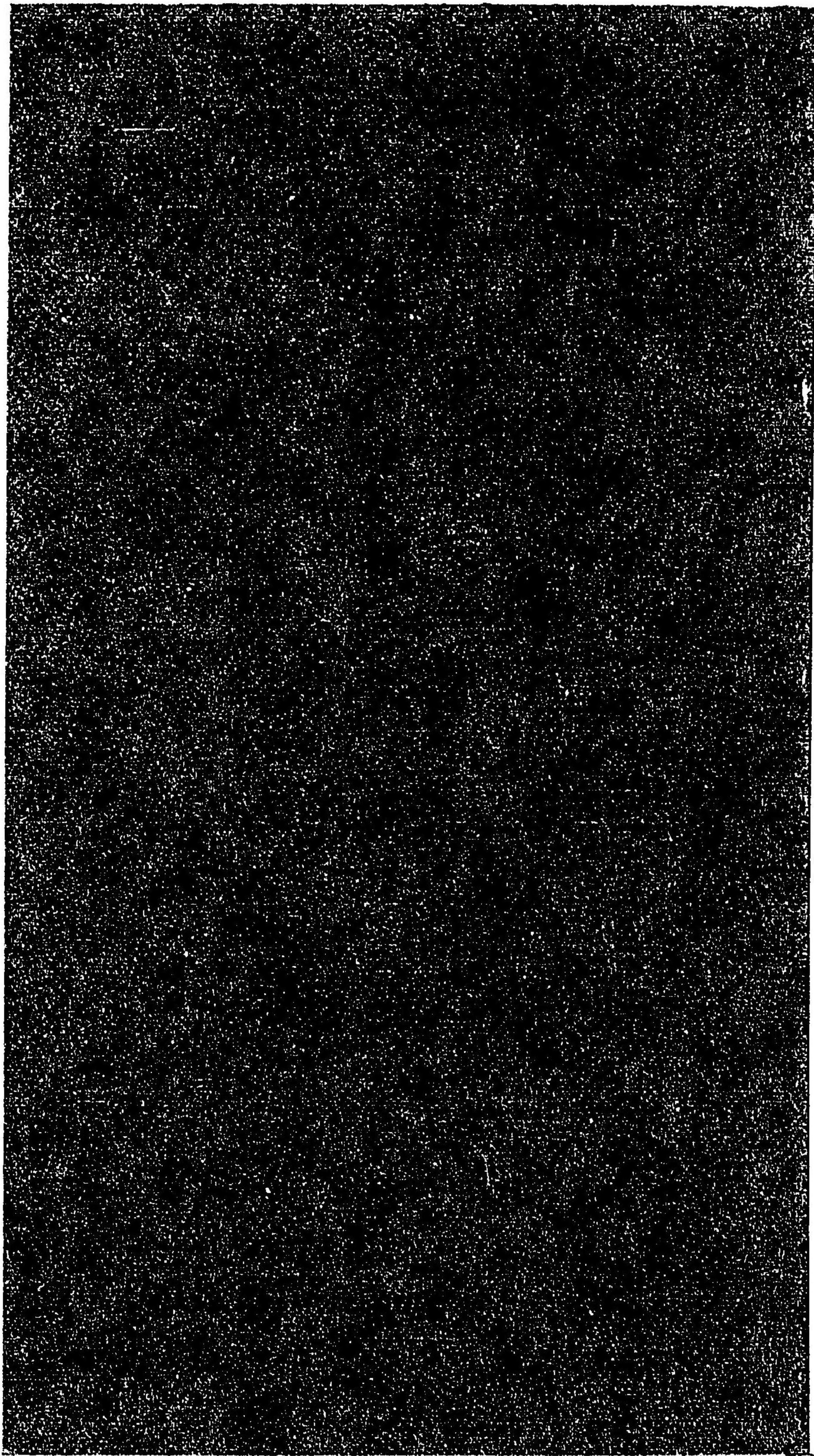
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

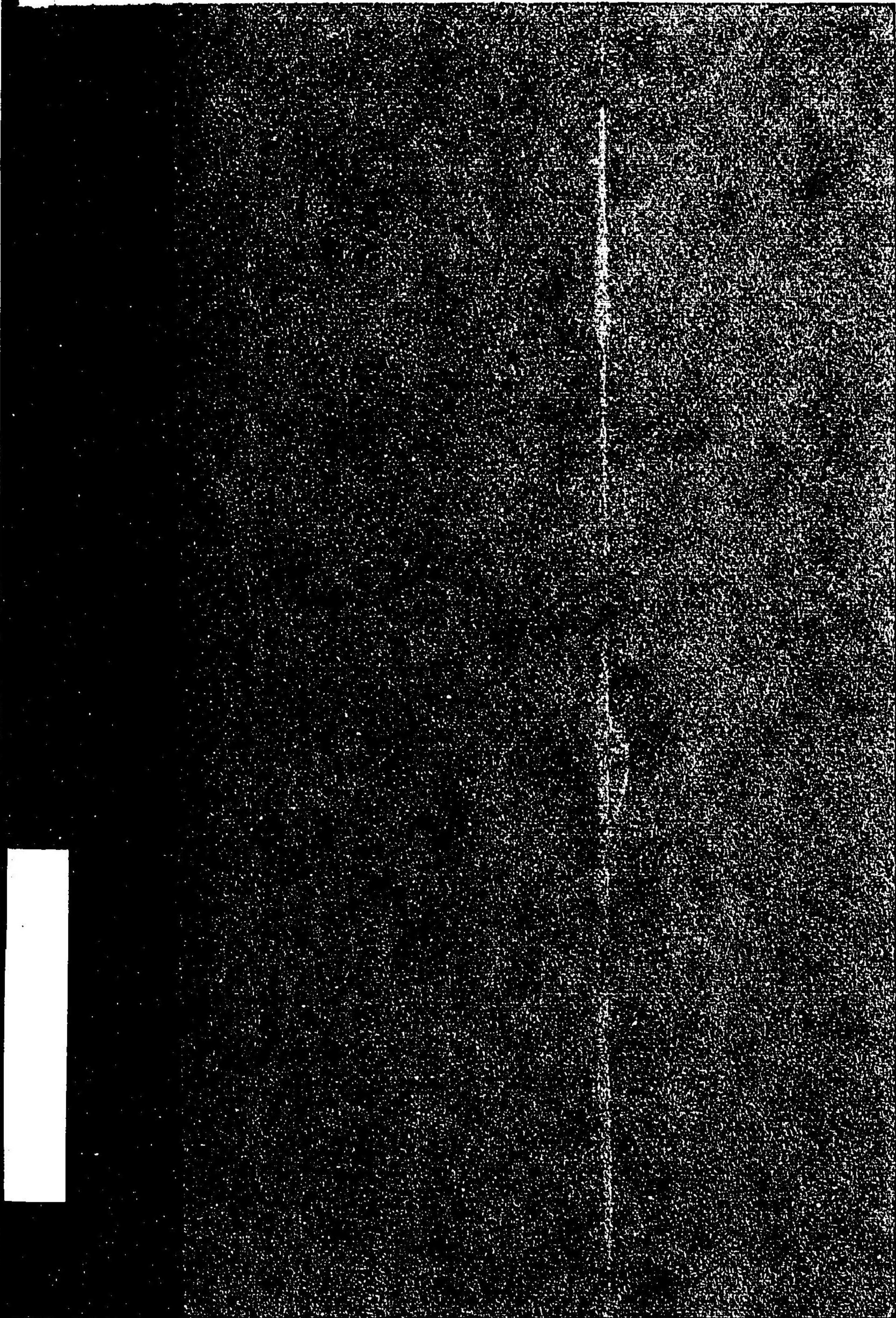
印刷者 山本 鋏次郎

東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

IF 4N31





60

58

伝染病研究所一覽

国立国会図書館

059370-000-8

60-58

伝染病研究所一覽

伝染病研究所

M31

CBF-0231



Faint, illegible text or markings along the left edge of the page.

